

「言語A：文学」 指導の手引き

2015年 第1回試験

「言語A : 文学」 指導の手引き

2015年 第1回試験

ディプロマプログラム (DP)

「言語A：文学」指導の手引き

2011年2月に発行
2011年2月、2011年11月、2012年8月、2013年8月に改訂の
英文原本 *Language A: literature guide* の日本語版
2014年6月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

注： 本資料に記載されている内容は、英文原本の発行時の情報に基づいています。ただし、ディプロマプログラムの概要を説明している「ディプロマプログラムとは」のセクションに限り、日本語版刊行時現在の新たな情報が反映されています。

非営利教育財団 国際バカロレア機構
(International Baccalaureate Organization)
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト：www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2014

国際バカロレア機構（以下、「IB」という。）は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくはwww.ibo.org/copyrightをご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール：sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、International Baccalaureate Organization の登録商標です。

IBの使命

IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

| | |
|--|-----------|
| はじめに | 1 |
| 本資料の目的 | 1 |
| ディプロマプログラムとは | 2 |
| 「言語A」の学習 | 7 |
| ねらい | 14 |
| 評価目標 | 15 |
| 評価目標の実践 | 16 |
| シラバス | 18 |
| シラバス概要 | 18 |
| 「言語A：文学」の指導の方法 | 19 |
| シラバスの内容 | 23 |
| 評価 | 29 |
| ディプロマプログラムにおける評価 | 29 |
| 評価の概要——標準レベル（SL） | 31 |
| 評価の概要：学校のサポートの下で行われる 自己学習コースの履修生——標準レベル（SL） | 32 |
| 評価の概要——上級レベル（HL） | 33 |
| 外部評価 | 34 |
| 内部評価 | 64 |
| 付録 | 88 |
| 指示用語の解説 | 88 |

本資料の目的

本資料は、「言語A:文学」を学校で計画、指導、評価するための手引きです。「言語A」の担当教師を対象としていますが、生徒や保護者に「言語A」について説明する際にも、ご活用ください。

本資料は、オンラインカリキュラムセンター（OCC）の教科のページで入手できます。OCC（<http://occ.ibo.org>）は、パスワードで保護されたIBのウェブサイトで、IBの教師をサポートする情報源です。また、本資料はIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。

その他のリソース

教師用参考資料や科目レポート、内部評価のガイダンス、評価規準の説明といったその他のリソースも、OCCで取り扱っています。過去の試験問題とマークスキームはIBストアで取り扱っています。

OCCでは、他の教師が作成したり、活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。教師たちによりウェブサイトや本、ビデオ、定期刊行物、指導案などの役立つリソースも提供されています。

2015年 第1回試験

ディプロマプログラムとは

ディプロマプログラム（DP）は16歳から19歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に組み立てられた教育プログラムです。幅広い分野を学習する2年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する力のある人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重し、評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

DPのプログラムモデル

DPは、6つの^{グループ}教科が中心となる核（「コア」）を取り囲んだ形のモデル図で示すことができます（図1参照）。DPでは、幅広い学習分野を同時並行して学ぶのが特徴で、生徒は「言語と文学」（グループ1）と「言語の習得」（グループ2）で現代言語を計2言語（または現代言語と古典言語を1言語ずつ）、「個人と社会」（グループ3）から人文または社会科学を1科目、「理科」（グループ4）から1科目、「数学」（グループ5）から1科目、そして「芸術」（グループ6）から1科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。生徒は各教科から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。



図1

DPのプログラムモデル

科目の選択

生徒は、6つの教科からそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、その他を標準レベル（SL）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあてることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に批判的^{クリティカル}な思考と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、学校外で実施されるIBによる外部評価で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価する課題（コースワーク）を課しています。

プログラムモデルの「コア」

DPで学ぶすべての生徒は、プログラムモデルの「コア」を形づくる次の3つの必修要件を履修します。「知の理論」（TOK：theory of knowledge）では、批判的^{クリティカルシンキング}な思考に取り組みます。具体的な知識について学習するのではなく、知るプロセスを探究するコースです。「知識の本質」について考え、私たちが「知っている」と主張することを、いったいどのようにして知ることかを考察します。具体的には、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究するよう生徒に働きかけていきます。TOKの目的は、共有された「知識の領域」の間のつながりを重視し、それを「個人的な知識」に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促していくことにあります。

「創造性・活動・奉仕」（CAS：creativity, action, service）は、DPの中核です。「IBの使命」や「IBの学習者像」の倫理原則に沿って、生徒が自分自身のアイデンティティーを構築するのを後押しします。CASでは、DPの期間を通じて、アカデミックな学習と同時並行して多岐にわたる活動を行います。CASは、創造的思考を伴う芸術などの活動に取り組む「創造性」（creativity）、健康的なライフスタイルの実践を促す身体的活動としての「活動」（action）、学習に有益であり、かつ無報酬で自発的な交流活動を行う「奉仕」（service）の3つの要素で構成されています。CASは、DPを構成する他のどの要素よりも、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築く」という「IBの使命」に貢献しているといえるかもしれません。

「課題論文」（EE：extended essay）では、生徒は、関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語（日本語の場合は8000字）の論文にまとめます。EEには、世界を対象に学際的な研究を行う「ワールドスタディーズ」として執筆されるものも含まれます。生徒は、履修しているDP科目から1科目（「ワールドスタディーズ」の場合は2科目）を選び、対象とする研究分野を定めます。また、EEを通じて大学で必要とされるリサーチスキルや記述力を身につけます。研究は、正式な書式で構成された論文にまとめ、選択した科目にふさわしい論理的で一貫した形式で、アイデアや研究結果を伝えます。高

いレベルのリサーチスキル、記述力、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としており、担当教員の指導のもと、生徒が、自分自身で選択したトピックに関する研究に自立的に取り組む機会となっています。

「指導の方法」と「学習の方法」

D Pでの「指導の方法」(approaches to teaching)と「学習の方法」(approaches to learning)は、熟慮された戦略やスキル、態度として、指導や学習の場に浸透しています。「指導の方法」も「学習の方法」も、「I Bの学習者像」に示されている人物像と本質的に関連しています。そして、生徒の学習の質を高めると同時に、D Pの最終評価やその先の学びのための礎をつくります。D Pでの「指導の方法」と「学習の方法」には、次のようなねらいがあります。

- ・ 学習内容を教えるだけでなく、学習者を導く存在としての教師のあり方を支援する。
- ・ 生徒の有意義で体系的な探究と、批判的思考や創造的思考を促すため、教師がファシリテーターとしてより効果的な戦略を立てられるよう支援する。
- ・ 各教科のねらい(科目別に掲げる目標以上のもの)と、それぞれの知識の関連づけ(同時並行的な学習)の両方を推進する。
- ・ 生徒が卒業後も積極的に学び続けるために、さまざまなスキルを系統的に身につけるよう奨励する。また生徒が良い成績を得て大学に進学できるよう支援すると同時に、大学在学中の学業の成就や卒業後の成功に向けて準備する。
- ・ D Pでの生徒の体験の一貫性と関連性をよりいっそう高める。
- ・ 理想主義と実用主義が融合したD Pの教育ならではの本質に対して、学校の理解を促進する。

5つの「学習の方法」(思考スキル、社会性スキル、コミュニケーションスキル、自己管理スキル、リサーチスキルの各スキルを高める)と、6つの「指導の方法」(探究を基盤とした指導、概念に重点を置く指導、文脈化された指導、協働に基づく指導、生徒の多様性に応じて差別化した指導、評価を取り入れた指導)には、I Bの教育を支える重要な価値感と原則が含まれています。

「I Bの使命」と「I Bの学習者像」

D Pでは、「I Bの使命」と「I Bの学習者像」に示された目的の達成に向かって、生徒たちが必要な知識やスキル、態度を身につけられるよう働きかけます。D Pにおける「指導」と「学習」は、I Bの教育理念を日々の実践において具現化したものです。

学問的誠実性

DPにおける「学問的誠実性」(academic honesty)は、「IBの学習者像」の人物像を通じて示されている価値感と振る舞いに則しています。学問的誠実性は、指導、学習、そして評価において、各自が誠実で公正であることを促し、他人とその成果物の権利を尊重することを奨励します。また、すべての生徒は学習を通じて身につけた知識や能力を示す機会を等しく得ることが保証されています。

評価のための課題(コースワーク)を含むすべての学習成果物は生徒本人が取り組んだものでなければなりません。学習成果物は生徒自身の独自のアイデアに基づくものであり、他人のアイデアや成果物を用いる場合は出典を明示しなければなりません。教師が課題について生徒に指導する場合や、生徒同士の協働作業を要する評価課題に取り組む際には、必ず、IBが定めるその教科のためのガイドラインを順守しなければなりません。

IBおよびDPにおける学問的誠実性について、より詳しくはIB資料『学問的誠実性』、『DP：原則から実践へ』、および同(英語版)『*General regulations: Diploma Programme* (総則：DP編)』を参照してください。DP科目の学校外で実施されるIBによる外部評価(external assessment)と学校内の教師が評価を手がける内部評価(internal assessment)に関連する学問的誠実性の情報は、本資料の中にも記載されています。

出典を明らかにする

国際バカロレア^{ディプロマ}資格(IB資格)取得志願者は、IBに提出する評価課題で引用した情報の出典をすべて明らかにしなければなりません。コーディネーターと教師は、このことに留意する必要があります。以下にこの要件について説明します。

IB資格取得志願者は、さまざまな媒体を用いた評価課題をIBに提出します。その中には、出版物または電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどの引用が含まれている場合があります。志願者は、他人の成果物やアイデアを用いる場合、参考文献目録の書式として標準的とされる一定の書式に従い、出典を明示しなければなりません。志願者が出典の明示を怠った場合、IBは規則違反の可能性があると調査を行います。場合によっては、IB最終資格授与委員会(IBM final award committee)による処分の対象となります。

IBは志願者が用いる参考文献目録や本文中の引用の書式については指定せず、志願者の学校の担当者または教師に判断を委ねています。幅広い科目を提供していることや、英語、フランス語、スペイン語の3言語に対応していること、そして多様な参考文献目録の書式があることから、特定の書式を要求することは非合理的かつ制限的です。実際には、ある特定の書式が最も頻繁に使われるかもしれませんが、学校はその科目と使用言語に適した書式を自由に選ぶことができます。その科目のために学校が選ぶ参考文献目録の書式にかかわらず、著者名、発行日、書名、ページ番号などの最低限の情報は明記する必要があります。

志願者は標準的とされる書式を用い、言い換えや要約を含むすべての参考資料の出典を一貫した書式で明示することが求められます。文章執筆の際、生徒は引用符（または、字下げなどのその他の方法）を用いて自分自身の言葉と他人の言葉を明確に区別し、適切な形で引用を示して参考文献目録に明記してください。電子情報を引用した場合、参考文献目録にアクセス日を明記してください。志願者に期待されているのは、参考文献目録の作成の完璧さではありません。すべての出典を明らかに示すことが求められているのです。志願者は、自分自身のものではない出版物や電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどもすべて出典を明らかにするように必ず指導を受けなければなりません。この場合も参照・引用の適切な書式を用いてください。

学習の多様性と学習支援の必要な生徒への取り組み

I B資格取得志願者で学習支援を必要とする生徒に対して、学校は平等に評価を受けるための配慮と妥当な調整を行わなければなりません。配慮や調整は、I B資料『受験上の配慮の必要な志願者について』および同（英語版）『*Learning diversity in the International Baccalaureate programmes: Special educational needs within the IB programmes*（I B教育と学習の多様性：I Bプログラムにおける特別な教育的ニーズ）』に沿って行わなければなりません。

「言語A」の学習

「言語と文学」（グループ1）とは

「言語と文学」（グループ1）は、次の3つのコースで構成されています。

- ・「言語A：文学」
- ・「言語A：言語と文学」
- ・「文学とパフォーマンス」（学際的科目）

具体的には、以下の表のようにまとめられます。

| コース名 | 標準レベル（SL） | 上級レベル（HL） |
|--------------|-----------|-----------|
| 「言語A：文学」 | ✓ | ✓ |
| 「言語A：言語と文学」 | ✓ | ✓ |
| 「文学とパフォーマンス」 | ✓ | |

上記の3コースはいずれも履修する言語を学習言語として使用した経験のある生徒を対象にデザインされています。しかし、生徒の言語的背景は、1言語のみの話者であるモノリンガルからより複雑な言語の習得歴をもつ者まで、かなり多様であることが少なくありません。テキスト（文学作品と非文学作品のいずれも）の学習は、特定の文章の中はもちろん、文化の中において言語がどのように意味を生成しているかについての理解を深める上での観点を身につけることにつながります。すべてのテキストを「形式」「内容」「目的」「読者」などの要素を通じて理解します。また、テキストを生み出し価値づける社会的、歴史的、文化的文脈、あるいはテキストが生成される特定の状況といった文脈を通じて理解していきます。テキストに向き合ったり、テキストを創造したりすることを通じて、言語がいかに思考方法やもののあり方を維持しているか、あるいは反対に、言語がいかに思考方法やもののあり方に挑戦しているかについての理解を深めることができます。

すべての生徒は、DPの要件を満たすために、上記の3コースから1科目を選択して、履修する必要があります。グループ1で提供されている3つのコースのうち2つを任意の組み合わせで、それぞれ異なる言語で履修することで「バイリンガルディプロマ」を取得することも可能です。「言語A：文学」コースと「言語A：言語と文学」コースには、SLとHLがありますが、グループ1とグループ6の要件を満たす学際的科目である「文学とパフォーマンス」コースはSLでしか履修できません。

グループ1のコースはいずれも、高いレベルの言語能力とコミュニケーションスキルに加え、社会的、美的、文化的リテラシーを高めることを通じて、生徒の将来の学問的な営みをサポートするようにデザインされています。3つのコースで取り扱うテキストには大きな違いがありますが、コースでの学習には、共通点があります。まったく別個の異なる領域を学ぶというよりは、むしろ、それぞれのコースによって焦点のあてる先に違いがあるのだといえるでしょう。「言語A:文学」コースは、文学批評に関わる文学的^{テクニク}な技法についての理解を深め、文学作品を独自に批評する力を育成することを重視しています。「言語A:言語と文学」コースは、意味というものが言語によって構築されていることと、そのプロセスにおける文脈の機能を理解することに焦点を絞っています。「文学とパフォーマンス」は、文学分析とパフォーマンスの役割についての研究を通じて、劇文学を理解していきます。

注: 言語の使用、分析、および批判的^{クリティカル}な振り返りの到達目標レベルは、3つのいずれのコースでも同一です。

各コースのシラバスと評価の要件は、開講しているすべての言語で同一です。指導および評価は、生徒が履修している言語で行われます。

「言語A:文学」とは

「言語A:文学」は、文学について学ぶコースで、幅広い言語が選択肢として提供されています。開講している言語の多くは、「指定作家リスト」(PLA:prescribed list of authors)に基づいて授業が行われています。PLAのある言語については、IB資料『DP手順ハンドブック』に記載されているほか、オンラインカリキュラムセンター(OCC)でも公開されています(<http://occ.ibo.org>)。「言語A:文学」は、IBの「母語の尊重」という方針を現実のものとする科目です(各学校は、IB資料『母語以外の言語によるIBプログラム学習』を参照して下さい。OCCで入手可能です)。同方針は、生徒の母語の文学的伝統に対して敬意をもつことを奨励し、生徒が母語とは異なる言語での学習指導の中、母語での話し言葉(口述)と書き言葉(記述)の能力を継続的に伸ばしていく機会を提供することを規定したものです。また、DPでは、母語学習を可能にする以下の2つの方法も用意されています。

- ・ 生徒が特定の言語の「言語A」を選択し、学校にその言語を指導する教師がいない場合、生徒は選択した言語を「言語A：文学」の「学校のサポートの下で行われる自己学習コース」(school-supported self-taught language A)として学ぶことができます(SLのみ)。
- ・ 特別申請手続きを通じて学校は、認定リストに掲載されていない言語での最終試験をリクエストすることが可能です。印刷された文献がほとんど、またはまったくない言語では、口述文学のテキストを含めることも可能です。ただし、選択された作品は価値のあるものでなくてはならず、信頼できる書き起こし原稿か録音のいずれか、またはその両方で入手可能なものでなくてはなりません。

「言語A：文学」では、文学を私たちが世界についてもっている概念や解釈、そして経験に関わるものとして捉えています。したがって、文学の学習は、人類が日々生きている上で出会う複雑な営みや不安、喜び、恐怖などを象徴的に表す方法を探究するものであると考えています。文学は、人類の創造的活動の中でも、長い歴史をもつ分野の1つです。「言語A：文学」では、文学の探究を通じて、自立的に考え、独自性に富んだ、^{クリティカル}批判的かつ明晰な思考の発達を促します。また、文学作品の理解と解釈では、想像力への敬意を育み、知覚的アプローチに取り組みます。

「言語A：文学」は、幅広い文学の学習を通じて、生徒が文学の芸術性を味わい、各自の見解について^{クリティカル}批判的に振り返りをする能力を身につけることを奨励しています。また、個々の文章や段落についての綿密な学習や、さまざまな批評のアプローチの検討を通じて、文学作品を文学的文脈と文化的文脈に位置づけて文学作品を学びます。IBの国際性と多様な文化の理解への取り組みを反映し、「言語A：文学」コースでは、1つの文化、あるいは複数の文化に根ざした1つの言語で書かれた文学作品だけではなく、幅広い文学を学びます。翻訳作品の学習は、文学作品を通じて異なる文化の視点を導入する上で特に重要です。文学の学習は、口述および記述でのコミュニケーションを通じて行うため、生徒は、言語運用能力を高め、洗練させることができます。

「言語A：文学」は、柔軟なコースです。教師は、「指定作家リスト」(PLA)に挙げられた作家の作品を選択し、生徒の特定のニーズと興味に合わせたコースを構成することができます。コースは、4つのパートに分かれており、それぞれ異なる要素に重点を置いています。

- ・ **パート1：** 翻訳作品 (Works in translation)
- ・ **パート2：** 精読学習 (Detailed study)
- ・ **パート3：** ジャンル別学習 (Literary genres)
- ・ **パート4：** 自由選択 (Options)

標準レベルと上級レベルの違い

「言語A：文学」のコースの構成は、標準レベル（SL）と上級レベル（HL）とで共通ですが、両レベルの間にはかなりの量的かつ質的な違いがあります。

SLの生徒は10作品を学びますが、HLでは13作品を学びます。

SLで求められる以下の2つの課題の評価は、HLの同等の課題の評価ほど要求が厳しくありません。

- ・ 口述課題「個人口述コメンタリー」——SLの生徒は、「パート2：精読学習」で学んだ2作品のうちの一つについて、口頭で10分間のきちんとした形式の論評のプレゼンテーションを行います。一方、HLの生徒は、パート2で学んだ詩について口頭できちんとした形式の論評を行い、もう片方の作品について教師とディスカッションを行います。
- ・ 筆記試験「試験問題1」——SLとHLのいずれの生徒も、初めて読む予備知識のない課題文（散文の抜粋または詩）の文学的分析に取り組みます。SLの生徒は、「考察を促すための問い」（guiding question）として設けられた2つの設問に沿って答えを書くのに対し、HLの生徒は設問なしに文学作品の論評を書きます。

さらに、「試験問題1」と「試験問題2」、および内部評価の規準も、HLとSLでは異なるものが適用されます。HLの生徒には、内容や作者の技法について、SLの生徒よりも深い理解を示すことが期待されています。SLで求められる知識や理解の深さ、また分析、統合、評価および構成能力はHLほど厳しくありません。

SLとHLの相違点は、以下の表のようにまとめることができます。

| パート | 標準レベル（SL） | 上級レベル（HL） |
|------------------|--------------------------------------|--|
| パート1： 翻訳作品 | 「指定翻訳作品リスト」（PLT）の中から2作品を学習。 | 「指定翻訳作品リスト」（PLT）の中から3作品を学習。 |
| パート2： 精読学習 | 「指定作家リスト」（PLA）の中から異なるジャンルの2作品を学習。 | 「指定作家リスト」（PLA）の中から異なるジャンルの3作品（そのうちの1つは詩）を学習。 |
| パート3： ジャンル別学習 | 「指定作家リスト」（PLA）の中から選択した同じジャンルの3作品を学習。 | 「指定作家リスト」（PLA）の中から選択した同じジャンルの4作品を学習。 |
| パート4： 自由選択 | 自由に選択した3作品を学習。 | 自由に選択した3作品を学習。 |

| 外部評価 | 標準レベル（SL） | 上級レベル（HL） |
|----------------|--|--|
| 試験問題1： 文学分析 | 「考察を促す問い」として提示される2つの設問に応じて、初めて読む課題文について文学的に分析する。 | 初めて読む課題文について論評を書く。 |
| 内部評価 | 標準レベル（SL） | 上級レベル（HL） |
| 個人口述コメント | 「パート2：精読学習」で学習した2作品のうちの1作品の抜粋について、口頭で10分間の論評を行う。 | 「パート2：精読学習」で学んだ詩について口頭で10分間の論評を行った後、残る2作品のうちの1つに基づいてディスカッションを行う。 |

既習事項

生徒がグループ1のコースを履修するにあたっての要件はありません。このコースを履修する生徒の言語の習得歴はさまざまであることが多く、マルチリンガル（多言語話者）の場合もあるでしょう。テキストに関する批評的な小論文を書いた経験があることを推奨していますが、そうした経験がないからといって、「言語A」の履修が認められないことがあってはなりません。学校は、生徒への支援について、IB資料『母語以外の言語によるIBプログラム学習』（OCCで入手可能）を参照してください。

グループ1の各コースでは、言語の継続的発達と、テキスト分析や文学鑑賞をめぐる表現など、多様なスキルの習得に取り組みます。グループ1のどのコースを選択するかは、生徒や教師の関心、そして生徒の将来希望する進路などによります。

MYPとの接続

IB中等教育プログラム（MYP）の「言語A」では、言語と文学のバランスのとれた学習に取り組みます。生徒は、言語と文学の本質や力、美しさへの理解と、言語と文学が世界的に及ぼす多くの影響力への認識を深めます。また、「言語A」では、幅広いジャンルの作品や世界文学の学習と文脈に位置づけられた言語学習を通じて、言語的発達と文学的理解を促します。生徒は、1言語または複数の言語を学習することを通じて、言語能力の可能性を最大限に活かすよう取り組みます。言語と文学は創造的なプロセスであるという理解を得ることにより、自己表現を通じて想像力と創造力を伸ばします。

DPの「言語A：文学」コースは、こうした基礎の上に構築されます。「言語A：文学」は、言語の習得を目的としたコースではないものの、生徒の表現力とさまざまな言語領域への理解を継続的に着実に伸ばしていくことを目指しています。

「言語A：文学」と「知の理論」

文学の学習は、「知の理論」(TOK)の土台を形成する「問い」と「振り返り」に取り組むための多くの機会を提供しています。「言語A:文学」コースでは、文学作品を読む上で、複数の異なるアプローチを取り上げます。また、言語についての綿密な分析はもちろん、文学を通じて示されるさまざまな異なるものの見方への理解、そしてそれらが生徒自身の文化(生徒自身の文化が複数ある場合も含めて)とどのように関わるかを理解することにも取り組みます。これらの活動はいずれも、生徒が知識の探究や、批判的思考、および振り返りに関わることを要求します。

以下に挙げる問い(IB資料『「知の理論」(TOK)指導の手引き』をもとに作成)は、教師が生徒に文学の領域における学習方法を探究するよう促し、関連する知識の問題や知る方法、知識の領域について生徒の批判的^{クリティカル}な振り返りの質を高めるのに役立つよう意図されています。

- ・ 文学作品は、解釈により広がりのあるものとなるか。あるいは逆に矮小化されるか。優れた解釈とそうでない解釈を隔てるものは何か。
- ・ 定義上、事実ではない創作文学であるフィクションの作品はいかにして知識を伝達するか。
- ・ 文学の正しい機能とは何か(現実の認識を捉えること、精神を導くこと、または高揚させること、感情を表現すること、美を創造すること、コミュニティを結びつけること、精神的な力を賛美すること、振り返りを促すこと、または社会の変化を推進することといった面ではどうか)。
- ・ 文学に親しみがあること自体は、知識を提供するか。仮にそうだとすれば、どのような種類の知識が得られるのか。事実の知識、作者に関する知識、伝統や形式のしきたり、心理、文化的歴史、または自分自身に関する知識などはどうか。
- ・ 作者に注目することで、文学についてどのような知識が得られるか。作者を観察したり、作者の人生に関して知っていることにより、作者の意図と創作プロセスそのものは理解されるか、されるべきであるか。創作プロセスは、それを直接観察することができない場合でも、最終的な作品と同様に重要であるか。作者の意図は、作品を評価する上で関係があるか。芸術作品は、芸術家が気づいていない意味を含んだり、伝えたりすることが可能か。
- ・ 作者、あるいは社会的文脈から切り離し、作品だけに焦点を絞ることで文学に関するどのような知識が得られるか。
- ・ 社会的、文化的、歴史的な文脈に焦点を絞ることにより、文学についてどのような知識が得られるか。
- ・ 文学を学ぶことは、個人の成長、または倫理観の形成においてどれくらい重要であるか。具体的にどのような形で重要であるか。
- ・ 文学の学習において、優れた証拠^{エビデンス}となるのは何か。
- ・ 文学の学習を通じて、どのような知識が得られるか。

- ・ 1つの言語から別の言語に翻訳される際に失われるものは何か。それはなぜ失われるのか。
- ・ 文学は、他の方法では表現できない真実を表現することが可能か。可能であるならば、それらはどのような種類の真実であるか。この形の真実は他の知の領域における真実とどのように異なるのか。

「言語A：文学」と国際的側面

I Bには「母語の尊重」という方針があります。この方針は、生徒が家庭で使う言語の文学的伝統に対して敬意をもつことを奨励し、母語とは異なる言語での学習指導の中、継続的に母語での話し言葉（口述）や書き言葉（記述）の能力を伸ばす機会を提供することを規定するものです。D Pでは、I Bは「言語A：文学」コースを通じて、生徒の母語に関する権利に対応しています。45言語以上の言語のコースが提供されているほか、特別申請手続きにより履修が可能な言語（「特別リクエスト言語」）もあります。S Lでは、「学校のサポートの下で行われる自己学習コース」の選択肢があることで、さらに多くの生徒が自らの母語で文学を学んでいます。

多様な文化の理解に関するI Bの取り組みは、特にシラバスの「パート1：翻訳作品」に顕著に反映されています。パート1では、生徒は、「指定翻訳作品リスト」（P L T）から選ばれた翻訳作品を通じて、さまざまな文化のものの見方を学びます。リストに挙げられた翻訳作品の原語は、30言語以上に上ります。生徒はこうした作品の学習を通じて、文学作品がそれらの置かれた文化的文脈においていかに重要な役割を占めているか、あるいは文学作品が経験および価値観をどのように反映し、表現しているかについて、理解を深めます。

グループ1のねらい

「言語A：文学」（SL/HL）と「言語A：言語および文学」（SL/HL）、「言語A：文学とパフォーマンス」（SL）は、以下を学習のねらいとしています。

1. 異なる時代、スタイル（文体）およびジャンルからの多様なテキストを紹介する。
2. 個々のテキストを綿密かつ詳細に分析し、関連性のあるものと結びつけることができる能力を養う。
3. 表現力（口述および記述によるコミュニケーション）を養う。
4. テキストが書かれ、受け取られた文脈の重要性を理解するよう促す。
5. テキストの学習を通じて、文化的背景の異なる人々の異なるものの見方があることや、それらの見方がどのように意味を構成しているかへの認識を促す。
6. テキストの格調高さや、様式的、美的な質の味わいを理解するよう促す。
7. 生徒が言語と文学に対して、生涯にわたって関心および喜びをもつよう促す。

「言語A：文学」のねらい

上記に加え、「言語A：文学」コース（SL/HL）は、以下の事項もねらいとしています。

8. 文学批評に使用される^{テクニック}技法について生徒の理解を促す。
9. 生徒が文学作品を独自に批評する力と、その自分の考えを裏づけをもって構成する能力を養う。

評価目標

「言語A：文学」コース（SL／HL）には、3つの評価目標があります。

1. 知識と理解

- ・ ジャンルや時代を代表するものとしての個々の文学作品の知識と理解、およびそれら相互の関係性を示す。
- ・ 文学の中で文化的価値が表現されている方法についての理解を示す。
- ・ 作品が書かれ、受け取られる文脈の重要性に対する認識を示す。
- ・ 関連性のある事例を根拠として、考えを立証し、正当化する。

2. 分析、統合および評価

- ・ 言語、構成、技法^{テクニク}、スタイル（文体）を分析する能力を示し、読者にどのような効果を与えているかを評価する。
- ・ 学習した文学のテキスト、または初めて読む文学のテキストについて、独自の文学批評を展開する能力を示す。
- ・ 文学の技法^{テクニク}の効果や、スタイル（文体）と意味との関連性について詳細に分析し、細部にわたって論じる能力を示す（**HLのみ**）。

3. 適切な言葉遣いおよびプレゼンテーションスキルの選択と使用

- ・ 言語使用域（レジスター）とスタイル（文体）を効果的に選択し、記述と口述の両方で考えを明確かつ流暢に表現する能力を示す。
- ・ 文学の学習に適切な用語と概念を自在に使いこなす能力を示す。
- ・ 口述と記述の両方で、理路整然とした議論を展開する能力を示す。
- ・ 文学作品について一貫性のある詳細な文学作品の論評^{コメンタリー}を書く能力を示す（**HLのみ**）。

評価目標の実践

| 評価目標 | コンポーネント どの評価要素で測るのか | 評価目標への到達度をどのように測るのか |
|-------------------|---|--|
| 1. 知識と理解 | 試験問題 1 Paper 1 | 生徒は、課題文（初めて読む文学作品の抜粋）に対して、読者としてテキストをどのように解釈したかを示すことが求められる。 |
| | 試験問題 2 Paper 2 | 1つのジャンルから少なくとも2作品について小論文を書く。生徒は、その作品についての理解と、その作品では文学的表現技法を通じてどのように意味が伝達されているかについての理解を示すことが求められる。 |
| | 記述課題 Written assignment | 生徒は、1つの文学作品の文学的要素についての探究をきちんとした形式の記述物（a formal piece of writing）としてまとめる。探究には、その作品の文化的基盤に対する理解によって得た知識を用いる。 |
| | 個人口述コメントリー （HLは、ディスカッションも実施） Individual oral commentary (and HL discussion) | SLの生徒は、「パート2：精読学習」で学んだ作品のうちの1つからの抜粋についての詳細な知識が評価される（HLの場合は、詩の抜粋または1編の詩の全体が対象となる）。 HLのディスカッションでは、パート2のもう1つの作品に関する知識と理解を評価する。 |
| | 個人口述プレゼンテーション Individual oral presentation | 生徒は、自分で選んだ課題を通じて「パート4：自由選択」の少なくとも1つの作品に関する知識と理解を示すことが求められる。 |
| 2. 分析、統合 および評価 | 試験問題 1 | 生徒は、課題文（初めて読む文学作品の抜粋）を分析し、作者の言語、構成、技法、スタイル（文体）の選択に対する評価を用いて、自分の解釈を記述することが求められる。 |
| | 試験問題 2 | 生徒は、少なくとも2つの作品の要素を組み合わせ、ある特定のジャンルに見られる文学的表現方法についてを問う設問にあてはめて言及することが求められる。 |
| | 個人口述コメントリー | 生徒は、学習した作品からの短い抜粋を分析し、その抜粋の中で用いられた技法の効果を評価することが求められる。 |

| 評価目標 | コンポーネント どの評価要素で測るのか | 評価目標への到達度をどのように測るのか |
|---------------------------------|-----------------------------|--|
| 3. 適切な言葉遣いおよびプレゼンテーションスキルの選択と使用 | 試験問題 1 | 生徒は、きちんとした形式の小論文にふさわしい言語を用い、理路整然とした一貫性のある解答を書くことが求められる。 HLの生徒は論評を書くことが求められる。 |
| | 試験問題 2 | 生徒は、1つの設問に対し、少なくとも2つの作品を比較して、きちんとした形式の小論文を書くことが求められる。 |
| | 記述課題 | 生徒は、自分の考えの発展とその考えの変遷の個人的な記述を、きちんとした形式にまとめることが求められる。 |
| | 個人口述コメンタリー（HLは、ディスカッションも実施） | 生徒はきちんとした口語言語使用域（レジスター）を用いて、構成され、焦点を絞った論評を行うことが求められる。 |
| | 個人口述プレゼンテーション | 生徒は課題と聞き手に合わせた言語を適用することが求められる。 3つの評価規準のうちの1つは課題と聞き手に対して口述プレゼンテーションが効果的であったかを評価する。 |

シラバス概要

| シラバスの構成 | 授業時間数 | |
|--|----------------|----------------|
| | 標準レベル (S L) | 上級レベル (H L) |
| パート1：翻訳作品 S L：2 作品 H L：3 作品 全作品を「指定翻訳作品リスト」(P L T) から選択する。 | 40 | 65 |
| パート2：精読学習 S L：2 作品 H L：3 作品 全作品を「言語A」の「指定作家リスト」(P L A) から選択する。作品は、それぞれ異なるジャンルから1つずつ選択する。 | 40 | 65 |
| パート3：ジャンル別学習 S L：3 作品 H L：4 作品 全作品を「言語A」の「指定作家リスト」(P L A) から選択する。作品は、すべて同じジャンルから選択する。 | 40 | 65 |
| パート4：自由選択 S L：3 作品 H L：3 作品 どのような組み合わせでもよい。作品を任意に選択する。 | 30 | 45 |
| 総授業時間数 | 150 | 240 |

「言語A:文学」の要件を満たすためには、所定の最低授業時間数が確保されていなければなりません。最低授業時間数は、H Lで240時間、S Lで150時間です。

「言語A：文学」の指導の方法

グループ1の3つのコースが重点を置くポイントはそれぞれ異なりますが、いずれも高いレベルの言語能力とコミュニケーションスキルに加え、社会的、美的、文化的リテラシーを高めることを通じて、生徒の将来の学問的な営みをサポートするようにデザインされています。言語と文学は、3つのコースで中心的役割を果たしています。生徒に可能な限り積極的にテキストに取り組むよう働きかけることを通じて、生涯にわたる学習を支援します。

これらのコースは、さまざまな指導の方法を取り入れられるようにデザインされています。教師は、コースのねらいと目標を満たすだけでなく、カリキュラムを解釈し、学校とそのコミュニティの状況に応じた授業をつくる上で、かなりの自由度と責任を与えられています。

「言語A：文学」の指導は、「IBの学習者像」、批判的思考と創造的思考のスキル、そして「学び方を学ぶ」というIBプログラムの教育原理に合致した方法に基づいている必要があります。コースの各段階で、生徒は探究学習に関わり、批判的思考に必要とされるスキルを身につける機会を与えられなければなりません。

教師は、知識の伝達者というよりも、むしろ、生徒の学習のサポーターと捉えられています。教師は、以下の方法を通じて、生徒自身が「IBの学習者像」を体現し、生徒の学習成果物にも学習者像が反映されるよう促していきます。

- ・ **誰もが参加できる、肯定的で安心できるクラスの学習風土（エートス）を提供する。** 生徒が自信をもって探究し、自分自身の考えを試したり、他者の考えに挑戦したりできるようにします。
- ・ **生徒の力を養う。** 学習者が能動的に学習に参加するアクティブラーニングの多様な方法（ディスカッション、ディベート、ロールプレイ、読書、記述活動および口述プレゼンテーションなど）を用いて、生徒自身がどのようなスキルを身につけたかを示すためのさまざまな批判的および創造的な機会を設けます。
- ・ **生徒は、それぞれさまざまな方法で学習することを認識する。** 授業で取り上げるテキストへの各生徒の理解と喜びを最大限に引き出せるよう、多様な活動や評価課題に取り組みます。
- ・ **批判的言説を促す。** 教師は、コースの初期段階から生徒が統合的かつ実践的な方法で、生徒が文学に対する批判的言説の言語を習得するようにします。
- ・ **芸術形式の1つとしての言語を鑑賞することを促す。** 単なるテキストの「解説」にとどまらず、学習するテキストについて、生徒がより幅広く人間性豊かに解釈する機会を得られるようにします。

- ・ **生徒に多様な種類のテキストを探究することを可能とする。** 文学的表現技法や文化および複雑性といった側面において多種多様なテキストを生徒に提示します。
- ・ **生徒が、文化的な文脈の機微や影響について調べる機会を提供する。** テキストの地理的、歴史的、民族的側面なども含まれます。
- ・ **文学について記述する機会を提供する。** 効果的なフィードバックにより生徒が体系的かつ分析的な記述を行うことをサポートします。
- ・ **テキストについて論理的な比較考察を行うプロセスに必要な足場づくり（スキヤフォールディング）を提供する。** 生徒は比較考察を口述および記述の両方で表現できなければなりません。

教師が以下の側面に重点を置くことも重要です。

- ・ **生徒の基本的スキルの習得を確かなものにする。** 基本的スキルは、文学や言語に関する生徒の学習や表現に欠かせません。
- ・ **生徒の学習目標を明確にする。** コースの要件と学習成果を参照しながら、定期的に学習目標について確かめます。
- ・ **体系的な形成的評価を提供する。** 生徒のパフォーマンスを向上するためには何を成すべきか、という観点から、特定の評価規準に照らして、定期的にフィードバックを行います。
- ・ **修辭的スキルの実践の機会を設ける。** 生徒がさまざまな聞き手に対して効果的な口述プレゼンテーションを行うために必要とされるスキルです。

コースの構成

コースの構成では、次の2つのリストは不可欠です。

- ・ 言語ごとに作成された「指定作家リスト」(PLA)
- ・ 全言語に共通の「指定翻訳作品リスト」(PLT)

教師は、生徒が履修するコースを構成する際、ジャンル、執筆年代（および、あてはまる場合には場所）などの要件に従わなければなりません〔詳細は、本資料の「シラバス概要」と、関連言語の「指定作家リスト」(PLA)を参照して下さい〕。

IBの原則では、教師は独自のコースを構成し、生徒および学校独自のニーズや関心を踏まえて指導することが強く推奨されています。以下はコースを構成する際に、踏まえるべき一般的なポイントです。

- ・ 教師はバランスがとれた一貫性のあるコースを構成することを目指します。各パートの中での関連性や、コース全体としてのある程度のつながりをもたせるようにします。

- ・ どのような考えでコースで取り扱う作品を選ぶにせよ、選ばれた作品は、その内容、テーマ、スタイル（文体）や技法、異なる作者および批判的な視点などの側面を比較し対比する機会を生徒に与えるようなものでなければなりません。
- ・ I Bはコースの4つのパートを特定の順序で教えることは求めています。ただし、教師は、特定の課題の締め切りや生徒のスキルの発達が、指導の順序に影響を与えることに気づくでしょう。
- ・ 教師は、目標とする学習成果とコースの各パートの学習に必要な時間を必ず考慮するようにします。
- ・ 学校全体という文脈の中で、教師は適宜、他の科目、特に「知の理論」（TOK）との教科横断的な同時並行学習を進めることに気を配るようにします。
- ・ より詳しい情報は、本資料の「シラバスの内容」や、「言語A：文学」コースに関する教師用参考資料（TSM：teacher support material）を参照して下さい。

スキル

このコースで目標とされる学習成果を収めるためには、生徒は、特定のスキルを確実に身につける必要があります。それらの重要性について、以下で説明します。

言語スキル

「言語A：文学」は、言語習得を目的とするコースではありませんが、生徒の言語スキルの発達と向上に取り組みます。具体的に生徒は、適切なスタイル（文体）と言語使用領域（レジスター）に配慮し、明確で曖昧さのない言語で考えを表現する能力を身につけることが期待されています。さらに、考えを理路整然と効果的に組み立て、きちんとした表現と文学的分析に適切な語彙を習得することも期待されています。

批判的アプローチ

文学作品を独自に批評する力を身につけるためには、文学を学ぶ上での方法論についてある程度の知識が必要です。批判的なものの見方を教えることは、このコースに欠かせない要素です。作品の読解の可能性についての幅広い理解を生徒に促すため、与えられたテキストに対し、異なる複数の批判的な見解を強調する場合があります。批判的な見方を体系的に指導することは、必ずしも理論についての詳細な学習を伴う必要はありません。むしろ、教師がより強制的かつ明示的に、生徒に文学についてどのような種類の問いがあり得るかを考えるよう働きかけることが必要な場合があります。

文学的表現技法

本資料で使用する「文学的表現技法」（literary convention）とは、特定の文学のジャンルにおける表現の特徴であるということが出来ます。例えば、演劇の会話やスピーチ、韻文

の韻律や脚韻、または散文小説の伏線や回想などです。当然ながら、これらの特徴は言語により異なる場合があります。

視覚的スキル

「見ること」は、一般的なマルチモーダル・リテラシー（multimodal literacy：複数の感覚を通じた情報処理）の一部です。記述されたテキストは、静止画像、動画および音声と組み合わせて存在する 경우가少なくありません。生徒が読み、書き、聞き、話すというリテラシースキルを身につける際に、これらのスキルと併用される視覚画像について、理解し解釈するスキルを発達させることは重要です。視覚的分析の特性を、グラフィック・ライティングや「映画と文学」といったトピックを取り上げる「パート4：自由選択」の一部として学習することも可能です。映画などの動画は、たびたび文学の学習の一環として取り上げられています。「言語A：文学」の教師は、芸術やメディアの教師であることは期待されていませんが、画像がその形式、内容および意味について、従来の書かれたテキストと同様の方法で分析される場合があることを生徒に認識させるようにすることが期待されています。

シラバスの内容

要件

生徒はSLで**10**作品、HLで**13**作品を学びます。本資料のほかに以下の2つのリストが必要です。いずれもOCCで入手可能です。

「**指定翻訳作品リスト**」(PLT) ——すべての「言語A」コースが共通で用いるリストです。教師は、このリストの中から作品を選択します。

「**指定作家リスト**」(PLA) ——開講が認められ、『DP手順ハンドブック』に記載されている「言語A」のコースのそれぞれにPLAがあります。教師はリストに記載されている作家の中から教材となる作品を選択します。生徒が「特別リクエスト言語」(special request language)を学習している場合、学校は適切な作品のリストを提供する責任があります。

「言語A」で開講されている言語にPLAがない場合は、教師がシラバスの要件にしたがって独自の情報源から選択した作品のリストを提出しなければなりません(詳細は、IB資料『DP手順ハンドブック』を参照して下さい)。

シラバスの各要素で学習すべき作品の要件を満たさなかった場合、生徒に与えられる得点の最高点が低くなります(該当する評価規準を参照)。

作家と作品

シラバスのいかなるパートにおいても、**同一パート内**で同じ作家を繰り返し扱うことは禁止されています。一方、同じ作家の別の作品をシラバスの**異なる2つのパート**において学習することは許可されています。

注： 同じ作品をシラバスの別のパートで繰り返して学習することはできません。

ジャンル

各言語のPLAには、4種類または5種類のジャンルが含まれています。SLで、PLAに記載されているジャンルのうち必ず3種類を、学習する言語の作品の中から選択しなければなりません。HLの場合は、必ず4種類のジャンルを選択しなければなりません。

年代

各言語のPLAリストには、異なる年代の作品が含まれています。「言語A:文学」の全体のシラバスには、少なくとも3つの異なる年代を必ず含めなければなりません。この場合の「年代」とは、世紀ごとの区分や、文学的または歴史的な出来事などに基づいた区分を指します。

場所

言語によっては、PLAに作家と密接に関連のある場所（複数の場合もある）が挙げられている場合があります。2～5カ所が特定されている場合、教師は必ず2つ以上の異なる場所からの作家の作品を選択しなければなりません。PLAに特定されている場所が5カ所以上ある場合、教師は、少なくとも3つの異なる場所からの作家の作品を選択する必要があります。

パート1：翻訳作品

学習する作品の数：SLは2作品、HLは3作品

学習する作品はすべて、必ず「指定翻訳作品リスト」(PLT)から選択しなければなりません。

注：パート1で学習する作品はすべて、必ず授業で取り上げなければなりません。

「パート1:翻訳作品」では、翻訳作品の綿密な読解に基づいて学習を進めます。生徒はさまざまな文化の人々の異なる観点を認識し、文学作品において文化が占める役割について考察します。

このパートでは、時代と場所の産物としての文学作品に対する理解を深めることを目標としています。生徒の作品への理解を深めるために、芸術的、哲学的、社会的、歴史的および伝記的考察などを取り上げます。

教師は、生徒の以下の能力を伸ばすことをねらいとします。

- ・ 作品の内容、および文学作品としての作品の質を理解する。
- ・ 個人の文化的経験とテキストを関連づけることにより、作品について独自の理解を示す。
- ・ 文学作品の中で文化的および文脈上の要素が占める役割を認識する。

パート2：精読学習

学習する作品の数：SLは2作品、HLは3作品

学習する作品はすべて、必ず「指定作家リスト」(PLA)から選択しなければなりません。各々の作品は異なるジャンルと作家の作品を選びます。HLでは、選択するジャンルに**必ず**詩を含めなければなりません。

注：パート2で学習する作品はすべて、必ず授業で取り上げなければなりません。

「パート2:精読学習」では、作品を内容および技法テクニックの面から詳細に分析することに重点が置かれます。精読学習を達成するには、作品解釈(クローズ・リーディング)と対象作品の重要な要素に関する詳細な分析を確実に行っていくアプローチが最も適しています。

教師は、生徒がさまざまな解釈や批判的なものの見方に習熟するよう促します。また、生徒が当該作品について個人的な考えを形成し、明確に述べるよう導きます。

このパートは、口述課題により評価されます。そのため、教師はあらゆる機会を利用して生徒にさまざまな文脈の文学について適切に語るスキルを身につけさせる必要があります。教師は、詳細分析のためのポイントが豊富に含まれている格調高い作品を選択するのが望まれます。

教師は、生徒の以下の能力を伸ばすことをねらいとします。

- ・ 学習する作品についての詳細な知識と理解を身につける。
- ・ 特定のジャンルについて適切な分析的な考えを示す。
- ・ 言語の使用により特定の効果がどのように達成されているかを明らかにして示し、登場人物、テーマ、設定などの要素を分析する。
- ・ 熟考を伴う情報に基づく考えを養うため、作品の精読に取り組む。

パート3：ジャンル別学習

学習する作品の数：SLは3作品、HLは4作品

学習する作品はすべて、「指定作家リスト」(PLA)の**同じ**ジャンルから選択しなければなりません。

注：パート3で学習する作品はすべて、必ず授業で取り上げなければなりません。

「パート3:ジャンル別学習」では、同じジャンルから選択された複数の作品を詳細に学びます。各ジャンルには文学的表現技法(literacy convention)と呼ばれる技法テクニックがあり(本資料『言語A:文学』の指導の方法)の「スキル」を参照)、作者は特定の芸術的目的を達

成するために、こうした技法テクニックを他の文学的特徴とともに用います。ジャンル別の分類は、特定のジャンルに関連する文学的表現技法や特徴に基づいて選ばれた文学作品を比較学習する上での枠組みを提供することを意図しています。

学習対象となるジャンルの比較学習が有意義なものとなるよう、教師は作品の選択にあたって注意を払うようにします。テーマで作品を分類することも役立つ一方、このパートでは、学習している作品のジャンルで用いられているさまざまな文学的表現技法についての理解を身につけることが期待されています。

教師は、生徒の以下の能力を伸ばすことをねらいとします。

- ・ 学習する作品についての知識と理解を身につける。
- ・ 学習するジャンルの文学的表現技法について明確に理解する。
- ・ 学習するジャンルにおける文学的表現技法を通じて、どのように内容が伝えられているかを理解する。
- ・ 選択された複数の作品の類似点と相違点を比較する。

パート4：自由選択

学習する作品の数：SL、HLとも3作品

学習する作品は担当教師が任意で選択します。前述の2種類の指定リストから選ぶ必要はありません。

注：パート4で学習する作品はすべて、必ず授業で取り上げなければなりません。

「言語A：文学」の中で、「パート4：自由選択」は、教師が自分自身の興味や関心を反映した作品をコースの教材に含めたり、生徒の特定のニーズに応えたりする機会を提供することを意図しています。特定の国や地域に特有の状況により、作品の選択が決まる場合もあるかもしれません。そのような状況の下では、コースで学習する他の作品とのバランスをとるために、特定のジャンルないし年代、または特定の国の作品が選ばれ、学習されることもあるでしょう。地域または国の教育課程の要件を満たすよう作品を選択することも考えられます。

このパートで学習する作品はすべて、自由に選択することができます。作品の組み合わせについても、「言語A」の学習言語で書かれた作品や翻訳作品であれば自由です。ただし、文学的価値のある作品、かつ適切な課題のある作品のみを選ぶよう注意しなければなりません。出版された（またはそれと同等の）3作品を学びます。

教師は、コースのねらいと目的にかなう限り、作品の指導の方法を自由に選択することが可能です。以下のとおり、3つの選択肢が設けられていることも、教師に開かれた可能性があることを示しています。また、教材を他の発想で組み合わせることも可能です。例えば、生徒自身が執筆する独自の創作文クリエイティブライティング（「選択肢1」のフィクションを除く散文に該当）

を批評する口述プレゼンテーションを行うことも、ドラマ、散文フィクションまたは詩のような文学ジャンルの学習には適しているでしょう。例えば、漫画（グラフィック・ノベル）のような新たなテキスト性は、「選択肢3」の「文学と映画」として扱うのに適しています。

どの選択肢でも、評価課題は同一です。生徒は、文学的な理解と、効果的な口述プレゼンテーションを行う能力で評価されます。

教師は、生徒の以下の能力を伸ばすことをねらいとします。

- ・ 学習する作品についての知識と理解を身につける。
- ・ 学習する作品について、独自の考えを提示する。
- ・ 口述プレゼンテーションを通じて表現力を身につける。
- ・ 聴衆の関心を集め、興味を引く方法を身につける。

選択肢1：フィクション以外の散文の学習（生徒自身が執筆するさまざまな形式の作品も含む）

この選択肢では、小説や短編小説などの分野以外の形式を取り上げます。「フィクション以外の散文」には旅行の随筆、自伝、書簡、エッセイ、スピーチ、または、「創作的ノンフィクション」などのより現代的な実験的作品も含まれます。

そのような種類の作品を、「形式」および「内容」の観点から学習していきます。さらに、技法を十分に把握することにより、生徒がこれらの形式を各生徒が執筆活動を通じて探究していくことを目指します。

パート4の共通のねらいに加え、この選択肢では生徒の以下の能力を伸ばします。

- ・ 執筆を通じて、フィクション以外の散文の技法を理解する。
- ・ それらの形式における、執筆上、効果的な作者の選択について詳しく理解する。
- ・ 自分の口述プレゼンテーションの土台として、自分自身の執筆作品を批評する。

選択肢2：新たなテキスト性

この選択肢は、生徒が急速に進化するテキストの形態について学ぶ機会を提供するものです。こうしたテキストの例としては、漫画（グラフィック・ノベル）や、ハイパーテキスト・ナラティブ（ハイパーテキスト形式の中に物語自体の構造を埋め込むもの）、ファン・フィクション（二次創作小説）があります。いずれもメディアを融合して活用し、容易なカテゴリー化を受けつけないものです。そのような題材を扱う場合には、以下のガイドラインを適用します。

- ・ テキストの形式は原作のテキストで、先行の文学作品を翻案ないし脚色したものでないこと
- ・ 明らかな美的／知的メリットがある題材であること

パート4の共通のねらいに加え、この選択肢では生徒の以下の能力を伸ばします。

- ・ 批評の枠組みの中で、新たなテキスト性を正当に評価する。
- ・ それらの形態が従来のテキストとどのように関連するかを探る。

- ・ それらの形式が、リテラシーのモードの変化というより大きな文脈にどのような関連性があるかを探る。

選択肢3：文学と映画

この選択肢では、中心となる3作品は、必ず出版された作品でなければなりません。作品の翻案、修正、ナラティブの戦略の比較、または読解や鑑賞のスキルに焦点を置いて学習を進めます。この選択肢はメディア学習の単元ではありません。より詳しくは本資料の『言語A：文学』の指導の方法の「視覚的スキル」を参照して下さい。

文学作品の映画化について学ぶことにより、文学と映画の個々の機能に関する理解を深めます。生徒は人生のあらゆる段階で、教室内でも教室外でも動画にさらされています。この選択肢を通じて、生徒は、学校で文学を学ぶことにより身につけた深い振り返りを、普段、何気なく見ているテレビや映画にあてはめることができるようになります。

パート4の共通のねらいに加え、この選択肢では生徒の以下の能力を伸ばします。

- ・ 映画とその文学的ルーツを批判的観点から比較する。
- ・ 文学作品を映画化する際に行われた数々の選択の理由を分析する。
- ・ 特定の時間と空間において、登場人物がいかに変化したかを理解する。
- ・ 象徴主義の効用と、それが1つのメディアから別のメディアにいかにか置き換えられるかを理解する。
- ・ 映画における音楽、音響効果、挿入画面などの要素の重要性を理解する。

学校のサポートの下で行われる自己学習コースの履修生

「学校のサポートの下で行われる自己学習 (self-taught)」コースで「言語A：文学」を学ぶ場合、履修できるのはSLのみです。自己学習する場合も、学校で指導されるSLの生徒と同じシラバスの要件を満たすことが期待されていますが、以下の例外があります。

- ・ 「パート4：自由選択」で学習対象とする3作品はすべて必ず「指定作家リスト」(PLA) から選択すること

学校は、自己学習コースの履修生が、可能な限りサポートを受けられるようにしてください。自己学習コースの履修生のための特別クラスを設置しても構いません。また、教師による指導が行われている「言語A」のクラス内でサポートをすることも可能です。そのような形でのサポートは自己学習コースの履修生が「パート1：翻訳作品」の「記述課題」を提出したり、「試験問題1」「試験問題2」に解答したりするために必要な情報とスキルを身につけるのに特に役立ちます。

自己学習コースの履修生はこのほか、自己学習コース用の「口述試験」(oral examination)の「セクション1」に使用する抜粋を選んだり、口述試験の「セクション2」の「個人プレゼンテーション」(individual presentation)を準備するにあたって指導が必要です。

ディプロマプログラムにおける評価

概要

評価は、指導および学習と一体化した要素です。DPでは、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけています。DPでは、学校外で実施されるIBによる外部評価（external assessment）、および学校内の教師が評価を手がける内部評価（internal assessment）の両方が実施されます。外部評価のための評価課題はIB試験官が採点します。一方、内部評価のための評価課題は教師が採点し、IBによるモデレーション（評価の適正化）を受けます。

IBが規定する評価には次の2種類があります。

- ・「形成的評価」（formative assessment）は、指導と学習の両方に指針を与えます。生徒の理解と能力の発達につながるよう、学びの種類や、生徒の長所と短所といった特徴について、生徒と教師に正確で役立つフィードバックを提供します。また、形成的評価からは、科目のねらいと目標に向けての進歩をモニタリングするための情報が得られるので、指導の質の向上にもつながります。
- ・「総括的評価」（summative assessment）は、生徒のこれまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DPでは、主にコース修了時または修了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもできます。教師はそうした評価を実施するよう推奨されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびカリキュラム編成と一体を成すものです。より詳しくは、IB資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IBが採用する評価アプローチは、評価規準に準拠した「絶対評価」です。集団規準に準拠した「相対評価」ではありません。この評価アプローチは、生徒の成果を特定の到達規準に照らし合わせ、そのパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果と比較するものではありません。DPにおける評価について、より詳しくはIB資料（英語版）『*Diploma Programme assessment: Principles and practice*（DPにおける評価：原則と実践）』を参照してください。

OCCでは、DPの科目のコースデザイン、指導、および評価の分野で教師を支援するための多様なリソースを入手できます。また、リソースをIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。試験問題の見本やマークスキーム（採点基準）、教師用参考資料、教科レポート、評価規準の説明など、その他の資料もOCCで取り扱っています。過去の試験問題やマークスキームはIBストアで購入できます。

評価の方法

I Bは生徒の成果物を評価するにあたって、複数の評価方法を採用しています。

評価規準

「評価規準」は、オープンエンド型の課題に対して適用されます。各規準は、生徒が身につけるようべき特定の能力に重点を置いています。評価目標は「何ができるべきか」を、評価規準は「どの程度よくできるべきか」を表します。評価規準を採用することで、個々のさまざまな解答の違いを識別することが可能となり、多様な解答を奨励することにつながります。各規準は、到達度に関する詳細な説明の項目で構成されています。項目は到達度別に段階的に並べられ、到達度ごとに1つまたは複数の評点が付与されています。また、ベストフィット（適合）モデルを用いて、各規準を個別に適用します。最高評点は規準の重要度に応じて異なる場合があります。各規準について付与された評点を合計したものを、その課題に対する総合点とします。

マークバンド（採点基準表）

「マークバンド」（採点基準表）は、求められるパフォーマンスの基準を1つにまとめた表です。教師はマークバンドに照らして、生徒の到達度を判断します。全体を1つにまとめた規準を、到達度に沿って段階的な項目に分けています。生徒のパフォーマンスの違いを識別するために、各項目に付与する評点には幅をもたせてあります。個々の到達度について、どの評点を付与するかを確定するには、ベストフィット（適合）アプローチを用います。

マークスキーム（採点基準）

「マークスキーム」（採点規準）は、特定の試験のために用意された分析的マークスキームを指します。分析的マークスキームは、生徒の最終的な解答や、その他特定の種類の答案を要求する試験問題のために作成されます。これらは、各設問に対する総合点を生徒の解答の異なる部分についてどのように配分するかについて試験官に詳細な指示を与えるものです。このマークスキームには、試験問題の解答で求められる内容や、評価規準をどのように適用するかについての手引きとなる採点のための注意事項などが含まれます。

評価の概要——標準レベル（SL）

2013年 第1回試験

| 評価の構成 | 配点 |
|--|------------|
| 外部評価（3時間） | 70% |
| 筆記試験 試験問題1：設問つき文学分析（1時間30分） <ul style="list-style-type: none"> ・ 2つの課題文（散文と詩の抜粋）で構成。 ・ 生徒は1つを選択し、2つの設問に答える形で文学分析を書く。（20点） | 20% |
| 筆記試験 試験問題2：小論文（1時間30分） <ul style="list-style-type: none"> ・ 出題は、各ジャンルにつき1問、計3問。 ・ 生徒は、このうちの1問につき生徒は「パート3：ジャンル別学習」の少なくとも2作品に関する小論文を書く。（25点） | 25% |
| 記述課題 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「パート1：翻訳作品」で学んだ1つの作品に関する小論文。（25点） ・ 「振り返りの記述」は、必ず300～400語（日本語の場合は600～800字）でなければならない。 ・ 小論文は、必ず1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）でなければならない。 | 25% |
| 内部評価 以下はコース修了時に学校内の担当教師による内部評価を実施した後、IBによる外部モデレーション（評価の適正化）を行う。 | 30% |
| 個人口述コメントリー（10分） <ul style="list-style-type: none"> ・ 「パート2：精読学習」で学習した作品の抜粋について、きちんとした形式の論評を口頭で行う。その後、教師からの質問に答える。（30点） | 15% |
| 個人口述プレゼンテーション（10～15分） <ul style="list-style-type: none"> ・ 「パート4：自由選択」で学習した作品に基づくプレゼンテーションで、内部評価の後、内部評価課題のパート2を通じてIBによる外部モデレーション（評価の適正化）を行う。（30点） | 15% |

評価の概要：学校のサポートの下で行われる 自己学習コースの履修生——標準レベル（SL）

2013年 第1回試験

| 評価の構成 | 配点 |
|--|------------|
| 外部評価（3時間） | 70% |
| 筆記試験 試験問題1：設問つき文学分析（1時間30分） ・ 2つの課題文（散文と詩の抜粋）で構成。 ・ 生徒は1つを選択し、2つの設問に答える形で文学分析を書く。（20点） | 20% |
| 筆記試験 試験問題2：小論文（1時間30分） ・ 出題は、各ジャンルにつき1問、計3問。 ・ 生徒は、このうちの1問につき生徒は「パート3：ジャンル別学習」の少なくとも2作品に関する小論文を書く。（25点） | 25% |
| 記述課題 ・ 「パート1：翻訳作品」で学んだ1つの作品に関する小論文。（25点） ・ 「振り返りの記述」は、必ず300～400語（日本語の場合は600～800字）でなければならない。 ・ 小論文は、必ず1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）でなければならない。 | 25% |
| 自己学習コース用 口述試験（20分） 2つの口述活動（いずれも必須）から成り、IBによる外部評価を行う。 | 30% |
| セクション1：個人口述コメントリー（10分） ・ 「パート2：精読学習」で学習した作品の抜粋について、きちんとした形式の論評を口頭で行う。（30点） | 15% |
| セクション2：個人口述プレゼンテーション（10分） ・ 「パート4：自由選択」で学習した2作品に基づくプレゼンテーション。（30点） | 15% |

評価の概要——上級レベル（HL）

2013年 第1回試験

| 評価の構成 | 配点 |
|--|------------|
| 外部評価（4時間） | 70% |
| 筆記試験 試験問題1：文学論評（2時間） ・ 2つの課題文（散文と詩歌の抜粋）で構成。 ・ 生徒は1つを選択し、論評を書く。（20点） | 20% |
| 筆記試験 試験問題2：小論文（2時間） ・ 出題は、各ジャンルにつき1問、計3問。 ・ 生徒は、このうちの1問につき生徒は「パート3：ジャンル別学習」で学習した少なくとも2作品に関する小論文を書く。（25点） | 25% |
| 記述課題 ・ 「パート1：翻訳作品」で学んだ1つの作品に関する「振り返りの記述」と小論文。（25点） ・ 「振り返りの記述」は、必ず300～400語（日本語の場合は600～800字）でなければならない。 ・ 小論文は、必ず1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）でなければならない。 | 25% |
| 内部評価 以下はコース修了時に学校内の担当教師による内部評価を実施した後、IBによる外部モデレーション（評価の適正化）を行う。 | 30% |
| 個人口述コメンタリーおよびディスカッション（20分） ・ 「パート2：精読学習」で学習した詩に関するきちんとした形式の口頭の論評と質疑応答（10分）、その後、パート2で学習した残る2作品のうちの1つの作品に基づくディスカッション（10分）を行う。（30点） | 15% |
| 個人口述プレゼンテーション（10～15分） ・ 「パート4：自由選択」で学習した作品に基づくプレゼンテーションで、内部評価の後、内部評価課題のパート2を通じてIBによる外部モデレーション（評価の適正化）を行う。（30点） | 15% |

外部評価

すべての評価課題について、評価規準が設けられています。評価規準は本資料に後述されています。

「試験問題1」には、4つの評価規準があります。

「試験問題2」には、5つの評価規準があります。

「記述課題」には、5つの評価規準があります。

各評価規準の「レベルの説明」は、「言語A:文学」コースの評価目標への到達度を測るために規定されたものです。筆記試験については、SLとHLで異なる評価規準が定められています。「パート1:翻訳作品」の「記述課題」については、SLとHLで同じ評価規準が適用されます。

外部評価は、SLとHLの最終評価の70%を占めます。

注：筆記試験、口述試験とも解答はすべて「言語A」の試験言語でなければなりません。

筆記試験

SLとHLともに、外部評価の対象となる筆記試験が2種類あります。試験では、「言語A:文学」の評価目標に則して、コースのシラバスの特定の分野についての生徒の能力を測ります。「試験問題1」は文学分析のスキル、「試験問題2」は「パート3:ジャンル別学習」で学習した作品に関するものです。HLでは、生徒は「試験問題1」で文学の^{ベーパー}論評を書く能力を示すことも求められています。

いずれの筆記試験においても、生徒は、解答の中で文学作品を参照して、考えを裏づけることが期待されています。「試験問題1」においては、初めて読む作品の抜粋、「試験問題2」では、「パート3:ジャンル別学習」で学習した作品を参照します。評価のいかなる部分においても、作品や抜粋の内容、またはあらすじを再現することは、期待されていません。

記述課題

SL、HLとも生徒は、「言語A:文学」コースの「パート1:翻訳作品」で学習した作品に関して1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）の「記述課題」と、300～400語（日本語の場合は600～800字）の「^{リフレクティブ・ステートメント}振り返りの記述」を完成することが求められます。

これらは I B によって外部で評価されます。「^{インタラクティブ・オーラル}対話形式の口述活動」のプレゼンテーションに関する「^{リフレクティブ・ステートメント}振り返りの記述」も評価の一部です。「記述課題」の一部は、授業時間中に教師の指導の下、完成します。

指定語数（字数）を超過した場合、「^{リフレクティブ・ステートメント}振り返りの記述」は最初の400語（日本語の場合は800字）、小論文の評価は最初の1500語（日本語の場合は3000字）に基づき評価されます。

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

外部評価のために S L と H L で提出される「記述課題」は生徒本人が取り組んだ学習成果物でなければなりません。しかし、学習成果物が「生徒本人が取り組んだものである」ことは、生徒自身がタイトルやトピックを決め、教師からの支援を一切受けずに、独自に内部評価課題に取り組まなければならないということではありません。以下の点について生徒にきちんと理解させるのは、教師の責任です。

- ・ 評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準（評価課題を通じて、生徒は与えられた評価規準に効果的に取り組むべきであること）

教師は、生徒が「記述課題」の計画を練るにあたって、アドバイスや情報を得るために率先して教師と話し合うよう促してください。また、生徒が指導を求めたことで減点してはなりません。ただし、課題を完成させるにあたって、教師からの相当量の助けを要した場合には、I B 資料『D P 手順ハンドブック』に記載されている該当する提出用書類にその旨を記入して報告するようにしてください。

教師には、学問的誠実性に関する概念、特に課題が本当に生徒本人が取り組んだものであること、および知的財産についての基本的な意味および重要性をすべての生徒に確実に理解させる責任があります。教師は必ず、すべての評価課題が要件に沿って取り組まれていることを確認しなければなりません。また、学習成果物が完全に生徒自身によるものでなければならないことを生徒に対して明確に説明しなければなりません。

学習のプロセスの一環として、生徒は内部評価課題の最初の草稿を作成したあと教師からアドバイスを受けることができます。ただし、ここで与えられるアドバイスは、どうすれば生徒の取り組みの質を高められるかについてであり、教師が草稿に注釈をつけたり、編集を加えたりすることは認められません。この第1稿に全般的なコメントをした後は、教師がさらに援助することはできません。

モデレーション（評価の適正化）または評価のために I B に提出されるすべての課題は、本当に生徒本人が取り組んだものであることを教師が必ず認証しなければなりません。また、決して規則違反の事実またはその疑いがあることはありません。各生徒は必ず課題が自分自身のものであること、またそれが最終版であることを正式に認めなければなりません。生徒が正式に教師（または D P コーディネーター）に最終版を提出した後は、課題を撤回することはできません。

生徒本人が取り組んだものであるかどうかは、生徒と課題の内容について議論すること、次のいずれか（または2項目以上）を精査することを通じて確認します。

- ・ 生徒が監督の下で取り組んだ、課題のトピックが決定された際の生徒の記述
- ・ 「記述課題」の最初の草稿
- ・ 引用・参考文献
- ・ 生徒自身が書いたものであることが確認されている他の課題とのスタイル（文体）の比較

教師と生徒が学習成果物について生徒本人が取り組んだものであると認証することは、評価の適正化を図るために試験官にサンプルとして提出する学習成果物だけに適用されるものではありません。すべての生徒の学習成果物に適用されます。生徒ないし教師が学習成果物について生徒本人が取り組んだものであることを認証できない場合、その学習成果物は採点対象外となります。その項目の評点は与えられず、成績評価も与えられません。詳細は、I B資料『学問的誠実性』と同（英語版）『*General regulations: Diploma Programme*（総則：ディプロマプログラム）』を参照してください。

外部評価の詳細——標準レベル（SL）

試験問題 1：設問つき文学分析

所要時間：1時間30分

配点：20%

「試験問題1」には、課題文として、生徒が初めて読む文学作品の抜粋が2つ含まれており、生徒はこれらの抜粋のうちの1つについて設問に沿って文学分析を書くよう指示されます。設問つきの文学分析とは、この場合、2つの「ガイディング・クエスチョン考察を促す問い」を手がかりに、作品の抜粋を解釈することを意味します。対象のうち、一方は詩で、もう一方は以下のような作品からの中から選ばれます。

- ・ 小説、または短編小説
- ・ エッセイ小論文
- ・ 伝記
- ・ 文学的価値のある新聞や雑誌の文章
- ・ 戯曲

分析の対象となる課題文は、それ自体完結した作品である場合と、長い作品からの抜粋である場合があります。「指定作家リスト」（PLA）に記載されている作家の作品や、授業で学習していると思われる作品は、可能な限り出題が回避されます。

「ガイディング・クエスチョン考察を促す問い」が2問〔1つは理解と解釈に関するもの、もう一方はスタイル（文体）に関するもの〕が提供されます。生徒は解答の中で、両方に取り組む必要があります。しかしながら、生徒はより高得点に到達するために「ガイディング・クエスチョン考察を促す問い」の範囲をこえて、関連のある要素を考察することも期待されています。表現の正確さと考えの一貫性に注意が払われていなければなりません。

試験問題は、本資料で後述されている評価規準に基づき評価されます。「試験問題1」の最高得点は、20点です。

試験問題2:小論文

所要時間：1時間30分

配点：25%

「試験問題2」には、「指定作家リスト」(PLA)の各ジャンルに関する小論文エッセイの設問が3つあります。このうち生徒が解答するのは**1つ**だけです。

小論文エッセイは、試験の条件に基づき、授業で学習した作品(つまり本)を試験場に持ち込まずに書きます。設問はいずれも、特定のジャンルの文学的表現技法を用いてどのように内容が伝達されているかを考察するように指示するものです。生徒は、「言語A:文学」コースの「パート3:ジャンル別学習」で学習した、少なくとも2作品について、類似点と相違点を比較し対比することが要求されます。作品の比較は「規準B:設問に対する答え」に基づき評価されます(本資料の「外部評価規準——標準レベル(SL)」および「外部評価規準——上級レベル(HL)」を参照して下さい)。

試験問題は、この資料に後述されている評価規準に従って評価されます。「試験問題2」の最高得点は25点です。

記述課題

配点 25%

「記述課題」は、「パート1:翻訳作品」で学習した翻訳作品に基づいています。生徒は、リフレクティブ・ステートメントリフレクティブ・ステートメント「振り返りの記述」とともに分析的エッセイ小論文を仕上げます。これはコースの期間中に作成され、外部評価を受けます。以下に挙げる詳細は、生徒が十分な情報を得て独自のエッセイ小論文を作成するためのものです。

- 提出する学習成果物**
- ・文学に関する小論文エッセイ(literary essay)
評価対象となる語数(字数):
1200～1500語(日本語の場合は2400～3000字)
 - ・関連した「振り返りの記述」リフレクティブ・ステートメント(reflective statement)
評価対象となる語数(字数):
300～400語(日本語の場合は600～800字)

目標 生徒がトピックを選び、「教師の監督の下での記述活動」スーパーバイズド・ライティングで書いた記述物の1つを発展させ、文学に関する分析的エッセイ小論文を作成する。

評価 「振り返りの記述」リフレクティブ・ステートメントと「小論文」エッセイの両方について、5つの評価規準(A～E)に基づき最高25点を付与する。

| | |
|------|---|
| プロセス | 口述、記述からなる4段階のプロセス（詳細は以下の各段階を参照）。 |
| 管理 | ^{リフレクティブ・ステートメント} 「振り返りの記述」と ^{スーパーバイズド・ライティング} 「教師の監督下での記述活動」での記述物のコピーをすべてファイルして保存。 |

第1段階：「対話形式の口述活動」（インタラクティブ・オーラル）

「対話形式の口述活動」^{インタラクティブ・オーラル}は、焦点を絞った授業中のディスカッションで、生徒全員と教師が参加します。各生徒は、1つの作品の「対話形式の口述活動」^{インタラクティブ・オーラル}の活動で、少なくともディスカッションの一部で自分から議題を提起しなければなりません。グループディスカッションや個々に議論に参加する形も可能です。教師はさまざまな形でディスカッションを設定することができます。

ディスカッションでは、以下の文化的および文脈的な検討事項を取り上げなければなりません。

- ・この作品において、時代と場所はどのように重要か。
- ・社会的および文化的文脈と諸課題について理解が簡単だったのは何か、また困難だったのは何か。
- ・作品の中の諸課題と自分自身の文化ならびに経験にどのような関連を見いだしたか。
- ・作品で見られる技法^{テクニック}について、どのような点が興味深かったか。

【形式的要件】

パート1で学習した作品1つにつき、少なくとも1つの口述活動を必ず実施すること。各作品に関するディスカッションは1作品につき最低30分間が目安。

第2段階：「振り返りの記述」（リフレクティブ・ステートメント）

「振り返りの記述」^{リフレクティブ・ステートメント}（reflective statement）は、短い記述演習（written exercise）で、「対話形式の口述活動」^{インタラクティブ・オーラル}の終了後すぐに、短時間で完成させなければなりません。生徒は、それぞれの「対話形式の口述活動」^{インタラクティブ・オーラル}について「振り返り」^{リフレクティブ・ステートメント}をすることを求められます。提出用の小論文^{エッセイ}と同じ作品に関する「振り返りの記述」^{リフレクティブ・ステートメント}を評価用として提出します。

「振り返りの記述」^{リフレクティブ・ステートメント}は以下の問いに基づいて作成します。

- ・「対話形式の口述活動」^{インタラクティブ・オーラル}を通じて、作品の文化的および文脈的な要素に対する理解がどのように発展したか。

【形式的要件】

長さ 300～400語（日本語の場合は600～800字）。超過した場合は、最初の400語のみを評価の対象とします。

提出時期 生徒の提出用小論文^{エッセイ}に使用された作品に関する「振り返りの記述」^{リフレクティブ・ステートメント}を、その小論文^{エッセイ}と一緒に提出します。

評価 リフレクティブ・ステートメント 「振り返りの記述」は、「評価規準A」を用いて、3点満点で評価します。

管理 リフレクティブ・ステートメント 「振り返りの記述」はすべて学校のファイルに保管します。

第3段階：トピックの展開——「教師の監督下での記述活動」

スーパーバイズド・ライティング 「教師の監督下での記述活動」(supervised writing)は、生徒からアイデアを引き出すためのきっかけとなるよう意図されています。生徒はここでのアイデアからトピックの着想を得て、最終的にエッセイ小論文に発展させます。この段階での最終目標は、生徒が適切なトピックに基づいた優れたエッセイ小論文を作成できるようサポートすることです。この目的を達成するため、生徒は学習した作品それぞれについて授業時間中に記述演習で向き合うことが必要とされています。

学習したそれぞれの作品について(SLで2作品、HLで3作品)、授業時間内に記述物を作成します。1つの記述物につき40～50分を費やすことが推奨されています。記述は、連続的な散文でなければなりません。授業終了時に記述物を教師に提出しなければならず、編集が加えられていない状態で、最終試験終了時までファイルに保存しておかなければなりません。

教師は、学習する個々の作品につき、3または4つのプロンプト(発問)を投げかけます。決して生徒が事前に準備する機会があってはならず、そのため、生徒が授業に先んじてプロンプトを与えられていないようにすることが最も重要です。

プロンプトのねらいは、各生徒のクリティカル批判的な記述を促し、課題のトピックに関する思考を刺激することです。プロンプトは、以下のリストや教師用参考資料から選択したり、教師が独自に考え出したりする場合があります。

スーパーバイズド・ライティング 生徒は、「教師の監督下での記述活動」で取り組んだ記述物から**1つ**を選び、それを提出用のエッセイ小論文に発展させます。監督下で取り組んだ記述物と最終的なエッセイ小論文の間には、必ず明白な関連がなければなりません。小論文では、生徒各自が独自のタイトルをつけ、選んだプロンプトを自分の考えに基づいて発展させていきます。

以下は、「教師の監督下での記述活動」に取り組むためのプロンプトの例で、特定の作品にどのようにプロンプトが適用され、適切なエッセイ小論文のタイトルへ展開させられるかを示しています。

プロンプト どの脇役が、最も重要な役割を演じていますか。

作品 『人形の家』ヘンリック・イプセン作

小論文のタイトル 「人形の家」のロールモデルとしてのリンデ婦人」

プロンプト 作品の中に、文化的価値観を伝えることが主な役割である登場人物がいると思いますか。

作品 『予告された殺人の記録』ガブリエル・ガルシア＝マルケス作

小論文のタイトル 「名誉の擁護者としてのビカリオ兄弟」

プロンプト シンボル、モチーフ、または1つ（あるいは希望により複数）のイメージを特定しなさい。それは作品の中でどのような役割を果たしていますか。

作品 「ドクトル・ジバゴ」 ボリス・パステルナーク作

小論文のタイトル 『ドクトル・ジバゴ』における氷と雪の対照的な役割

注：「言語A：文学」コースの教師用参考資料には、さらに多くのサンプルが収録されています。

【形式的要件】

長さ 特に長さの制限はありません。

提出物 ^{スーパーバイズド・ライティング}「教師の監督下での記述活動」での記述物の現物は提出されません。

評価 ^{スーパーバイズド・ライティング}「教師の監督下での記述活動」での記述物自体には配点はありませんが、生徒の学習成果物が本当にその生徒本人が取り組んだものであるかどうかを確認するために使用される場合があります。

管理 この課題は、生徒が記述物の作成のために用いる文学作品を参照しながら取り組む「オープnbック」形式で行います。したがって生徒は、その作品を手元に置くことが可能です。注釈をつけることは構いませんが、生徒が二次的資料にアクセスすることは認められていません。

^{スーパーバイズド・ライティング}「教師の監督下での記述活動」での記述物はすべて学校のファイルに保管されなければなりません。

第4段階：小論文の作成

生徒は、1つの作品の文学的要素について1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）の^{エッセイ}小論文を作成します。^{エッセイ}小論文は、教師の指導の下、授業中に完成させた^{スーパーバイズド・ライティング}「教師の監督下での記述活動」の記述物の1つを発展させたものです。

教師の役割

- ・ ^{エッセイ}小論文のトピックの展開について助言する。
- ・ ^{スーパーバイズド・ライティング}「教師の監督下での記述活動」と^{エッセイ}小論文の関連性を話し合う。
- ・ トピックが、課題の焦点と長さに適切なものであるようにする。
- ・ 生徒が作成した^{エッセイ}小論文の最初の草稿を読み、生徒にフィードバックする。これは、会話の形態、書面のいずれか一方、あるいは両方で行う。書面の場合は、^{エッセイ}小論文の草稿上ではなく、別の書面を作成すること。

小論文の完成と生徒自身による小論文の提出

生徒は、最初の草稿についてフィードバックを得た後、教師からさらに助言を得ることはできません。フィードバックを受けたら、それ以上の援助を受けずに必ず自分で「記述課題」を完成させなければなりません。

注：提出する課題は、生徒本人が取り組んだ学習成果物でなければなりません。生徒および指導教員は、その学習成果物が生徒本人が取り組んだものであることを必ず認証しなければなりません。

【形式的要件】

- 長さ** 1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）。語数（字数）制限を超過した場合は、最初の1500語を評価の対象とします。
- 提出物** 最終小論文^{エッセイ}と、それに関連する「振り返りの記述」^{リフレクティブ・ステートメント}を評価用に提出します。小論文はきちんとした形式のものでなければなりません。
- 評価** 最終小論文^{エッセイ}は、評価規準B、C、DおよびEを用いて、22点満点で評価されます。
- 管理** 最終小論文^{エッセイ}とともに、関連する「振り返りの記述」^{リフレクティブ・ステートメント}を必ず提出しなければなりません。

外部評価の詳細：学校のサポートの下で行われる自己学習コースの履修生——標準レベル（SL）

自己学習コースの履修生が作成する評価課題は、すべて外部評価の対象となります。「試験問題1」^{ペーパー}と「試験問題2」^{ペーパー}については、学校で授業を受講している履修生の場合と同様です。各評価項目の配点、評価規準および採点についても学校で授業を受講している履修生の場合と同様です。

自己学習コースの履修生用の「口述試験」は、外部評価となります。

記述課題

評価規準と配点は、学校で授業を受講している履修生の場合と同様です（詳細は本資料「外部評価規準——SL」を参照してください）。

第1段階：ジャーナル（記録日誌）の執筆

学校で授業を受講している履修生が受ける「対話形式の口述活動」^{インタラクティブ・オーラル}の代わりに、自己学習コースの履修生は、「パート1：翻訳作品」で学習した2つの翻訳作品の両方についてジャーナル（記録日誌）をつけ、その中で以下の問いに対する自分の考えを記します。

- ・ 時代と場所は、この作品にとって、どのような点で重要であるか。
- ・ 社会的文脈および諸課題について、理解が容易であったものと困難であったものはそれぞれ何か。
- ・ 作品の中の諸課題と、自分自身の文化や経験の間に、どのような共通点を見いだしたか。
- ・ 作品の中に用いられた技法テクニックのどのような点に興味があったか。

第2段階：「振り返りの記述」（リフレクティブ・ステートメント）

「記述課題」で取り組む文学作品を決定した後で、自己学習コースの履修生は、その作品に関するジャーナルの内容に基づき、300～400語（日本語の場合は600～800字）の「振り返りの記述」リフレクティブ・ステートメントを書く必要があります。「振り返りの記述」は以下の設問に対する答えでなければなりません。

- ・ ジャーナルをつけることを通じて、その作品の文化的および文脈的事項についての理解はどのように発展したか。

「振り返りの記述」リフレクティブ・ステートメントは、規準Aを用いて3点満点で評価されます。「記述課題」と一緒に提出する「振り返りの記述」リフレクティブ・ステートメントは、「記述課題」で取り組んだ作品に関するものでなければなりません。「記述課題」で取り上げるトピックと明確な関連がある必要はありません。

第3段階：トピックの展開

自己学習コースの履修生は、必ず以下に挙げるプロンプトの中から1つを選び、学習した2つの文学作品のうちの1つに適用します。プロンプトをきっかけにして、選択した特定の作品にふさわしい小論文エッセイのタイトルを考えなければなりません。プロンプトがどのようにタイトルにつながるかの例は、本資料の「外部評価の詳細——SL」の「記述課題」で取り上げられています。また、教師用参考資料では、より多くのサンプルを見ることができます。

- ・ 主人公が行った大きな選択と決断（あるいはそのいずれか）が作品に及ぼした影響は何か。
- ・ 歴史や伝統の考えは、作品の中にどのように反映されているか。
- ・ 脇役の登場人物で最も重大な役割を担っているのは誰か。
- ・ 自然の景観は、この作品にどの程度重要な影響を及ぼしているか。
- ・ 作品の中に文化的価値観を代弁する登場人物がいると考えるか。
- ・ 作者は作品の中で時の経過をどのように伝えているか。
- ・ 当該作品は、どのような点で現実的であろうとしているか。
- ・ 1つかそれ以上のシンボル、モチーフ、またはイメージの要素を特定しなさい。それらは作品の中でどのような役割を担っているか。

第4段階：小論文の作成

生徒は1つの文学作品の文学的要素について、上記のプロンプトから発展させた1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）の小論文^{エッセイ}を執筆します。

生徒は必ず自分の力で小論文^{エッセイ}を完成させ、外部評価のために提出しなければなりません。提出する際は、学習した作品のそれぞれについて、適切な「振り返りの記述」^{リフレクティブ・ステートメント}を添付します。

最終小論文^{エッセイ}は、記述課題向けの規準B、C、DおよびEを用いて、22点満点で評価されます。

注：提出する課題は必ず生徒の独自の学習成果物でなければならず、生徒は自分自身が取り組んだ課題であることを認証しなければなりません。

自己学習コース履修生用の口述試験

評価規準および配点は、学校で授業を受けている生徒と同様です（詳細は本資料「外部評価規準——SL」の項を参照）。

セクション1：個人口述コメントリー

配点：15%

所要時間：準備20分、実施10分

個人口述コメントリーは、コースの「パート2：精読学習」で学習した作品の抜粋に関する文学分析です。

抜粋の選択

自己学習コースの履修生は、パート2で学習した作品の抜粋を選択するにあたって、IBが提供する「考察を促す問い」^{ガイディングクエスチョン}を用いて、自己学習コースの履修生用の口述試験の「セクション1」（「個人口述コメントリー」）のための準備をします。それぞれの抜粋は、必ず約40行の長さ（または約40行相当の詩の一部または全文）でなければなりません。口述試験は、設問に沿って抜粋に関する綿密な文学分析を提示するため、抜粋する部分の内容は、必ず設問と関連していなければなりません。

焦点および構成

生徒は、抜粋の中の重要な点をすべて特定し、探究に取り組みます。具体的には、以下の点が含まれます。

- ・ 抜粋をそれが基づく作品の文脈（詩の場合はその本体）の中に可能な限り正確に位置づける。
- ・ 作者の技法^{テクニック}〔スタイル（文体）の工夫や、それが読者に与える影響など〕の効果について述べる。

^{コメンタリー}
口頭で論評をする際には、抜粋そのものに焦点を絞り、必要があれば作品全体に関連づけます（例えば、文脈を設定する）。抜粋部分を、生徒がその作品全体について知っている事項のすべてについて言及するためのきっかけとして用いてはなりません。

^{コメンタリー}
論評は、一貫して整然と構成されたものである必要があります。相互に関連性のない事項の羅列、筋書きのナレーション、あるいは抜粋や詩を行ごとに言い換えたものであってはなりません。

セクション2：個人口述プレゼンテーション

配点：15%

所要時間：10分

「個人口述プレゼンテーション」は、コースの「パート4：自由選択」で学んだ2つの作品に基づいています。

準備

自己学習コース履修生用の口述試験に先立ち、生徒はパート4で学んだ3つの作品のうちの2つについて口述プレゼンテーションのための準備メモを作成します。

生徒は、準備メモを試験場にもち込むことが許可されています。これらのメモは、プレゼンテーションの録音とともに、試験官に送付します。メモは、必ず要点を箇条書きしたものでなければなりません。プレゼンテーションで話す内容の全文原稿であってはなりません。

注：学校のサポートの下で行われる自己学習コースの履修生用口述試験の詳細については、IB資料『DP手順ハンドブック』と、OCCにある自己学習コースの履修生用の口述試験に関する指示を参照して下さい。

外部評価規準——標準レベル（SL）

概要

評価対象となる課題はすべて、評価規準に基づいて評価されます。評価規準は、本資料に記載されています。標準レベル（SL）と上級レベル（HL）では、「^{ベーパー}試験問題1」と「^{ベーパー}試験問題2」で異なる評価規準が適用されます。

SLにおける外部評価規準の概要は以下のとおりです。

試験問題 1：設問つき文学分析

SLでは、4つの評価規準があります。

| | | |
|-----|--------------|------------|
| 規準A | 理解と解釈 | 5点 |
| 規準B | 作者の選択についての認識 | 5点 |
| 規準C | 構成 | 5点 |
| 規準D | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 20点 |

試験問題 2：小論文

SLでは、5つの評価規準があります。

| | | |
|-----|-----------------------|------------|
| 規準A | 知識と理解 | 5点 |
| 規準B | 設問に対する答え | 5点 |
| 規準C | 当該ジャンルの文学的表現技法についての認識 | 5点 |
| 規準D | 構成と展開 | 5点 |
| 規準E | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 25点 |

記述課題

SLでは、5つの評価規準があります。

| | | |
|-----|------------------|------------|
| 規準A | 「振り返りの記述」の要件を満たす | 3点 |
| 規準B | 知識と理解 | 6点 |
| 規準C | 作者の選択についての認識 | 6点 |
| 規準D | 構成と展開 | 5点 |
| 規準E | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 25点 |

教師と生徒の参考のために、試験官が使用している評価規準の具体的な「レベルの説明」を以下に記します。

試験問題 1：設問つき文学分析（SL）

規準 A：理解と解釈

- ・ 生徒の解釈は、どの程度課題文の考えや感情に対する理解を示しているか。
- ・ 生徒の考えは、どの程度課題文を参照し、裏づけられているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 課題文の理解は非常に限定的で、解釈の大部分が的外れ、または無意味（あるいはその両方）である。 |
| 2 | 課題文を一部理解しているが、解釈がほとんど試みられておらず、参照もほとんどされていない。 |
| 3 | 課題文への理解が十分であることが解釈を通じて示されている。解釈の大部分が、課題文への参照によって裏づけられている。 |
| 4 | 課題文の理解が優れていることが解釈を通じて示されている。解釈は、課題文への参照によって完全に裏づけられており、説得力がある。 |
| 5 | 課題文の理解が非常に優れていることが解釈を通じて示されている。解釈は、適切に選択された参照部分によって裏づけられており、一貫性と説得力がある。 |

規準 B：作者の選択についての認識

- ・ 生徒の分析は、作者の言語、構成、技法^{テクニック}およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについて、どの程度の認識を示しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、事実上まったく参照がなされていない。 |
| 2 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、いくつかの参照がなされているが、分析はなされていない。 |
| 3 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、十分な参照と、多少の分析がなされており、多少の認識を示している。 |
| 4 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、優れた分析と認識が示されている。 |
| 5 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、非常に優れた分析や認識が示されている。 |

規準C：構成

- ・ 考えの提示の仕方は、どの程度、効果的に構成されているか。また、どの程度、一貫性があるか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|------------------------------------|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 考えは、ほとんど構成されておらず、一貫性が事実上まったく見られない。 |
| 2 | 考えは、一部構成されているが、一貫性が欠如していることが多い。 |
| 3 | 考えは、十分に構成されており、多少の一貫性もある。 |
| 4 | 考えは、満身に構成されており、一貫性がある。 |
| 5 | 考えは、効果的に構成されており、非常に優れた一貫性がある。 |

規準D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では生徒による課題に適切な語彙、語調、文章の構成、専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文章の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは、ときどき明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。 |
| 3 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文の章構成もいくつかのささいな誤りはあるが、ある程度適切である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成が優れている。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、効果的で注意深く選ばれおり、的確である。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。 |

試験問題 2：小論文（SL）

規準 A：知識と理解

- ・「パート 3：ジャンル別学習」で学んだ文学作品についての設問に対する生徒の答えは、その作品についてどの程度の知識と理解を示しているか。

注：パート 3 の文学作品は、必ず「指定作家リスト」（PLA）から選ばれたものでなければならず、かつ設問にふさわしいジャンルのものでなければなりません。この条件を満たしていない場合には、この規準の評点は 3 が最高点となります。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について知識がほとんどなく、まったく理解していない。 |
| 2 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品についていくらかの知識はあるが、ほとんど理解していない。 |
| 3 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について十分な知識があり、いくらかの理解がある。 |
| 4 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について優れた知識と理解がある。 |
| 5 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について非常に優れた知識と理解がある。 |

規準 B：設問に対する答え

- ・生徒は、設問の特定の要求をどの程度よく理解しているか。
- ・生徒は、これらの要求に対してどの程度対応しているか。
- ・設問の要求について、文学作品をどの程度巧みに比較し対比しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 生徒は、設問の主な含意を事実上まったく認識しておらず、考えの大部分は、的外れで無意味である。設問との関連で用いられた作品について、有意義な比較は見られない。 |

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 2 | 生徒は、設問の主な含意を限定的にしか認識しておらず、考えは、ときどきの外れで無意味である。設問との関連で用いられた作品について、有意義な比較はほとんど見られない。 |
| 3 | 生徒は、設問の主な含意の大部分を関連性のある考えで応答している。設問との関連で用いられた作品について、比較がなされているが、内容は表面的といえる。 |
| 4 | 生徒は、設問の主な含意を一貫して関連性のある考えで応答している。設問との関連で用いられた作品について、適切な比較がなされている。 |
| 5 | 生徒は、設問の主な含意と微妙な内容について、関連性があり注意深く探究された考えで応答している。設問との関連で用いられた作品について、効果的な比較がなされている。 |

規準C：当該ジャンルの文学的表現技法についての認識

- ・生徒は、文学作品および設問について、文学的表現技法をどの程度、特定して認識しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 文学的表現技法を事実上まったく特定しておらず、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連する展開はない。 |
| 2 | 文学的表現技法の例がときどき正確に特定できているが、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連する展開はない。 |
| 3 | 文学的表現技法の例の大部分は正確に特定できしており、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連する展開もいくらか見られる。 |
| 4 | 文学的表現技法の例が明確に特定され、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連して、効果的に展開されている。 |
| 5 | 文学的表現技法の例が明確に特定され、設問、または使用された作品（あるいはその両方）への明白な関連性をもって効果的に展開されている。 |

規準D：構成と展開

- ・ 考えの提示の仕方が、いかに体系的に一貫性をもって展開されているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 考えにまとまり、または構成が事実上まったく認められず、一貫性または展開（あるいはその両方）が見られない。 |
| 2 | 考えに多少のまとまりと構成が見られるものの、一貫性または展開（あるいはその両方）が非常に少ししか見られない。 |
| 3 | 考えが十分な構成をもって適切にまとめられ、一貫性と展開についても多少注意が払われている。 |
| 4 | 考えが非常によくまとめられており、構成、一貫性、展開も優れている。 |
| 5 | 考えが効果的にまとめられており、構成、一貫性、展開も非常に優れている。 |

規準E：言語

- ・ 言葉遣いがどの程度、明確、かつ多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では、生徒による課題に適切な語彙、語調、文章の構成や専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文章の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは、ときどき明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。 |
| 3 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成も、いくつかのささいな誤りはあるが、十分に適切である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成が優れている。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、効果的で注意深く選ばれおり、的確である。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。 |

記述課題（SLおよびHL）

規準A：「振り返りの記述」の要件を満たす

- 生徒は「対話形式の口述活動」を通じて、文化的および文脈的要素に関する理解をどの程度示しているか。

注：「振り返りの記述」の語数（字数）制限は、300～400語（日本語の場合は600～800字）です。語数（字数）制限を超過した場合、1点の減点が適用されます。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 「対話形式の口述活動」に関する振り返りは、文化的および文脈的要素に関する生徒の理解が表面的であることを示している。 |
| 2 | 「対話形式の口述活動」に関する振り返りは、文化的および文脈的要素に関する生徒の理解が一部発展していることを示している。 |
| 3 | 「対話形式の口述活動」に関する振り返りは、文化的および文脈的要素に関する生徒の理解が発展していることを示している。 |

規準B：知識と理解

- 生徒は、選択した文学作品の知識と理解を示すにあたって、トピックと小論文^{エッセイ}をどの程度効果的に使用しているか。

注：文学作品は、必ず「指定翻訳作品リスト」（PLA）から選ばれたものでなければなりません。この条件を満たしていない場合には、この規準の評点は3が最高点となります。

| 評点 | レベルの説明 |
|-----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 小論文は、課題に用いられた作品について、多少の知識を示しているが、ほとんど理解を示していない。 |
| 3～4 | 小論文は、課題に用いられた作品についての知識や理解、また、多少の洞察力を示している。 |
| 5～6 | 小論文は、課題に用いられた作品についての詳細な知識や理解と、鋭敏な洞察を示している。 |

規準C：作者の選択についての認識

- 生徒の分析は、作者の言語、構成、技法およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについて、どの程度の認識を示しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|-----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 言葉遣い、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について、多少の言及はあるが、ほとんど認識されていない。 |
| 3～4 | 言葉遣い、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について、十分に認識されている。 |
| 5～6 | 言葉遣い、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について、卓越した認識がなされている。 |

規準D：構成と展開

- 考えが、いかに効果的にまとめられているか。また、作品への参照が、考えの展開にいかにか巧みに結びつけられているか。

注：小論文の語数（字数）制限は、1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）です。語数（字数）制限を超過した場合、2点の減点が適用されます。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 考えをまとめようと試みられているが、作品からの例は、ほとんど用いられていない。 |
| 2 | 考えが表面的にまとめられ、展開されており、作品からの例がいくつか結びつけられ、使用されている。 |
| 3 | 考えが十分にまとめられ、展開されており、作品からの適切な例が結びつけられ、使用されている。 |
| 4 | 考えが効果的にまとめられ、展開されており、作品からの例がうまく結びつけられ、使用されている。 |
| 5 | 考えが説得力をもってまとめられ、展開されており、作品からの例が効果的に結びつけられ、使用されている。 |

規準E：言語

- ・ 言葉遣いがどの程度、明確、かつ多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）および専門用語の選択がどの程度適切か（この文脈では、生徒による課題に適切な語彙、語調、文章の構成や専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文章の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは時折明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成はかなり正確であるが、誤りや矛盾が明白である。レジスターとスタイル（文体）は大部分において課題に適切である。 |
| 3 | 言葉遣いは明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成にはささいな誤りはあるものの十分に正確である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成が優れている。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、効果的で注意深く選ばれおり、的確である。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。 |

外部評価の詳細——上級レベル（HL）

試験問題1：文学論評

所要時間：2時間

配点：20%

「試験問題1」には、生徒が初めて読む未習の文学作品の抜粋が2つ含まれており、生徒はこれらの抜粋のうちの1つについて論評コメントを書くよう指示されます。このうち、一方は詩で、もう一方は以下のような作品の中から選ばれます。

- ・ 小説、または短編小説
- ・ 小論文エッセイ
- ・ 伝記
- ・ 文学的価値のある新聞や雑誌の文章

コメンタリー
論評に使用される課題文は、それ自体完成した作品である場合と、長い作品からの抜粋である場合があります。「指定作家リスト」(PLA)に記載されている作家の作品や、授業で学習していると思われる作品は、可能な限り回避されます。

コメンタリー
「論評」とは、エッセイ小論文の形態による詳細な作品解釈(クローズ・リーディング)を指します。生徒は、内容、テクニック技法、スタイル(文体)、テーマ、言葉遣いなどの側面を詳しく探究する必要があり、以下の能力に応じて評価されます。

- ・ 詳細な参照によって裏づけられた解釈を通じて、課題文に表された考えおよび感情への理解を明示する。
- ・ 課題文が、どのように効果を達成したかについて分析し深く理解する。

コメンタリー
論評へのアプローチや構成については、許容範囲が広いものの、コメンタリー優れた論評は単に作品の内容をまとめたり、効果を羅列したりするのではなく、それらについて説明するものです。すべての論評は、コメンタリー一貫性をもって論旨を展開するものでなければならず、相互に無関係な段落で構成された論評が高い評点を得ることはありません。

ペーパー
「試験問題1」は、本資料に記載された評価規準に基づき評価されます。「ペーパー試験問題1」の最高得点は、20点です。

試験問題2：小論文

所要時間：2時間

配点：25%

評価の詳細は、SLと同様です。

記述課題

配点：25%

評価の詳細は、SLと同様です。

外部評価規準——上級レベル(HL)

概要

評価対象となる課題はすべて、評価規準に基づいて評価されます。評価規準は、本資料に記載されています。標準レベル(SL)と上級レベル(HL)では、異なる評価規準が適用されます。

HLにおける外部評価規準の概要は以下のとおりです。

試験問題 1：論評

H Lでは、以下の4つの評価規準があります。

| | | |
|-----|--------------|------------|
| 規準A | 理解と解釈 | 5点 |
| 規準B | 作者の選択についての認識 | 5点 |
| 規準C | 構成と展開 | 5点 |
| 規準D | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 20点 |

試験問題 2：小論文

H Lでは、5つの評価規準があります。

| | | |
|-----|-----------------------|------------|
| 規準A | 知識と理解 | 5点 |
| 規準B | 設問に対する答え | 5点 |
| 規準C | 当該ジャンルの文学的表現技法についての認識 | 5点 |
| 規準D | 構成と展開 | 5点 |
| 規準E | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 25点 |

記述課題

H Lでは、5つの評価規準があります。

| | | |
|-----|------------------|------------|
| 規準A | 「振り返りの記述」の要件を満たす | 3点 |
| 規準B | 知識と理解 | 6点 |
| 規準C | 作者の選択についての認識 | 6点 |
| 規準D | 構成と展開 | 5点 |
| 規準E | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 25点 |

教師と生徒の参考のために、試験官が使用している評価規準の具体的な「レベルの説明」を以下に記します。

試験問題 1：文学論評（HL）

規準 A：理解と解釈

- ・ 生徒の解釈は、どの程度課題文の考えや感情に対する理解を示しているか。
- ・ 生徒の考えは、どの程度課題文を参照し、裏づけられているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 課題文を一部理解しているが、解釈がほとんど試みられておらず、参照もほとんどされていない。 |
| 2 | 課題文を一部理解しているが、解釈がほとんど試みられておらず、参照もほとんどされていない。 |
| 3 | 課題文への理解が十分であることが解釈を通じて示されている。解釈の大部分が、課題文への参照によって裏づけられている。 |
| 4 | 課題文の理解が優れていることが解釈を通じて示されている。解釈は、課題文への参照によって完全に裏づけられており、説得力がある。 |
| 5 | 課題文の理解が非常に優れていることが解釈を通じて示されている。解釈は、適切に選択された参照部分によって裏づけられており、一貫性と説得力がある。 |

規準 B：作者の選択についての認識

- ・ 生徒の分析は、作者の言語、構成、技法^{テクニック}およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについて、どの程度の認識を示しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、事実上まったく参照がなされていない。 |
| 2 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、いくつかの参照がなされているが、分析はなされていない。 |
| 3 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、十分な参照と、多少の分析がなされており、多少の認識を示している。 |
| 4 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、優れた分析と認識が示されている。 |
| 5 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、非常に優れた分析や認識が示されている。 |

規準C：構成と展開

- ・ 考えの提示の仕方は、どの程度、効果的に構成されているか。また、どの程度、一貫性があるか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|------------------------------------|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 考えは、ほとんど構成されておらず、一貫性が事実上まったく見られない。 |
| 2 | 考えは、一部構成されているが、一貫性が欠如していることが多い。 |
| 3 | 考えは、十分に構成されており、多少の一貫性もある。 |
| 4 | 考えは、満身に構成されており、一貫性がある。 |
| 5 | 考えは、効果的に構成されており、非常に優れた一貫性がある。 |

規準D：言語

言葉遣いがどの程度、明確、かつ多様で、正確であるか。

- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）および専門用語の選択がどの程度適切か（この文脈では、生徒による課題に適切な語彙、語調、文章の構成や専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文章の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは、ときどき明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。 |
| 3 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成も、いくつかのささいな誤りはあるが、十分に適切である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成が優れている。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、効果的で注意深く選ばれおり、的確である。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。 |

試験問題 2：小論文（HL）

規準 A：知識と理解

- ・「パート 3：ジャンル別学習」で学んだ文学作品についての設問に対する生徒の答えは、その作品についてどの程度の知識と理解を示しているか。

注：パート 3 の文学作品は、必ず「指定作家リスト」（PLA）から選ばれたものでなければならず、かつ設問にふさわしいジャンルのものでなければなりません。この条件を満たしていない場合には、この規準の評点は 3 が最高点となります。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について知識がほとんどなく、まったく理解していない。 |
| 2 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について多少の知識があり、表面的だが理解している。 |
| 3 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について一応十分な知識と理解がある。 |
| 4 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について優れた知識と理解がある。 |
| 5 | パート 3 で学習した作品に関する設問との関連において、当該作品について鋭敏な知識と理解がある。 |

規準 B：設問に対する答え

- ・生徒は、設問の特定の要求をどの程度よく理解しているか。
- ・生徒は、これらの要求に対してどの程度対応しているか。
- ・設問の要求について、文学作品をどの程度よく比較し対比しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 生徒は、設問の主な含意をほとんど認識しておらず、考えは、ときどきの外れ、または無意味（あるいはその両方）である。設問との関連で用いられた作品について、有意義な比較はほとんど見られない。 |
| 2 | 生徒は、設問の主な含意の大部分を一部、関連性のある考えで応答している。設問との関連で用いられた作品について、表面的な比較の試みがなされている。 |

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 3 | 生徒は、設問の主な含意を一貫して関連性のある考えで応答している。設問との関連で用いられた作品について、十分な比較がなされている。 |
| 4 | 生徒は、設問の主な含意といくつかの微妙な内容について、一貫して関連性がある考えで応答している。設問との関連で用いられた作品について、比較を通じて多少の評価がなされている。 |
| 5 | 生徒は、設問のすべての含意と微妙な内容について、説得力がある、思慮深い考えで応答している。設問との関連で用いられた作品について、効果的な比較がなされている。 |

規準C：当該ジャンルの文学的表現技法についての認識

- 生徒は、文学作品および設問について、文学的表現技法をどの程度、特定して認識しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | いくつかの文学的表現技法を特定できているが、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連する展開は限定的である。 |
| 2 | 文学的表現技法の例が、ときどき正確に特定できている。設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連した展開もいくつか見られる。 |
| 3 | 文学的表現技法の例が、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連して、満足のいく形で特定され展開されている。 |
| 4 | 文学的表現技法の例が、明確に特定され、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に関連して、効果的に展開されている。 |
| 5 | 文学的表現技法の例が、鋭敏に特定され、設問、または使用された作品（あるいはその両方）に明確に関連して、説得力をもって展開されている。 |

規準D：構成と展開

- 考えの提示の仕方が、いかに体系的に一貫性をもって展開されているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 考えにほとんどまとまりがなく、表面的な構成が見られるものの、一貫性または展開（あるいはその両方）が欠如している。 |

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 2 | 考えに多少のまとまりがあり、認識できる構成があるが、一貫性と展開が欠如していることが多い。 |
| 3 | 考えが、適切な構成とともに十分にまとめられており、一貫性と展開についても注意が払われている。 |
| 4 | 考えが、非常に優れた構成と一貫性、展開を伴い、効果的にまとめられている。 |
| 5 | 考えが、卓越した構成と一貫性、展開を伴い、説得力をもってまとめられている。 |

規準E：言語

- ・ 言葉遣いがどの程度、明確、かつ多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）および専門用語の選択がどの程度適切か（この文脈では、生徒による課題に適切な語彙、語調、文章の構成や専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文章の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは、ときどき明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。 |
| 3 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成も、いくつかのささいな誤りはあるが、十分に適切である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成が優れている。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、効果的で注意深く選ばれおり、的確である。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。 |

記述課題（SLおよびHL）

規準A：「振り返りの記述」の要件を満たす

- 生徒が「対話形式の口述活動」を通じて、文化的および文脈的要素に関する理解をどの程度示しているか。

注：「振り返りの記述」の語数（字数）制限は300～400語（日本語の場合は600～800字）です。語数（字数）制限を超過した場合、1点の減点が適用されます。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 「対話形式の口述活動」に関する振り返りは、文化的および文脈的要素に関する生徒の理解が表面的であることを示している。 |
| 2 | 「対話形式の口述活動」に関する振り返りは、文化的および文脈的要素に関する生徒の理解が一部発展していることを示している。 |
| 3 | 「対話形式の口述活動」に関する振り返りは、文化的および文脈的要素に関する生徒の理解が発展していることを示している。 |

規準B：知識と理解

- 生徒は、選択した文学作品の知識と理解を示すにあたって、トピックと小論文^{エッセイ}をどの程度効果的に使用しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|-----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 小論文は、課題に用いられた作品について、多少の知識を示しているが、ほとんど理解を示していない。 |
| 3～4 | 小論文は、課題に用いられた作品についての知識や理解、また、多少の洞察力を示している。 |
| 5～6 | 小論文は、課題に用いられた作品についての詳細な知識や理解と、鋭敏な洞察を示している。 |

規準C：作者の選択についての認識

- ・ 生徒は作者の言語、構成、技法およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについてどの程度認識しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|-----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について、多少の言及はあるが、ほとんど認識されていない。 |
| 3～4 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について、十分に認識されている。 |
| 5～6 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について、卓越した認識がなされている。 |

規準D：構成と展開

- ・ 考えが、いかに効果的にまとめられているか。また、作品への参照が、考えの展開にいかにもうまく結びつけられているか。

注：小論文の語数（字数）制限は、1200～1500語（日本語の場合は2400～3000字）です。語数（字数）制限を超過した場合、2点の減点が適用されます。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 考えをまとめようと試みているが、作品からの例は、ほとんど用いられていない。 |
| 2 | 考えが表面的にまとめられ、展開されており、作品からの例がいくつか結びつけられ、使用されている。 |
| 3 | 考えが十分にまとめられ、展開されており、作品からの適切な例が結びつけられ、使用されている。 |
| 4 | 考えが効果的にまとめられ、展開されており、作品からの例がうまく結びつけられ、使用されている。 |
| 5 | 考えが説得力をもってまとめられ、展開されており、作品からの例が効果的に結びつけられ、使用されている。 |

規準E：言語

- ・ 言葉遣いがどの程度、明確、かつ多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル（文体）および専門用語の選択がどの程度適切か（この文脈では、生徒による課題に適切な語彙、語調、文章の構成や専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文章の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは、ときどき明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。 |
| 3 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成も、いくつかのささいな誤りはあるが、十分に適切である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成が優れている。レジスターとスタイル（文体）は一貫して課題に適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、効果的で注意深く選ばれおり、的確である。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、課題に適切である。 |

内部評価

内部評価の目的

内部評価は、コースを構成する不可欠の要素であり、SLとHLを履修する生徒は必ず取り組まなければなりません。生徒は、内部評価を通じて、習得したスキルと知識を活用できることを示します。内部評価のための課題に向けて生徒を準備することは、通常の授業の一環として行わなければなりません。

SLの生徒は、「個人口述コメンタリー」として、「パート2：精読学習」で学んだ作品の1つから抜粋した課題文について、口頭で10分間の^{コメンタリー}論評（その後の質疑応答も含む）を行うことが求められます。

HLの「個人口述コメンタリー」では、詩、または詩からの抜粋が出題されます。生徒は、10分間の口頭での^{コメンタリー}論評の後、パート2の残る作品のうちの1つについて、10分間のディスカッションを行います。

SL、HLともに、生徒は、「パート4：自由選択」で学習した作品の1つかそれ以上についての口述プレゼンテーションを完了することが求められます。

SL、HLともに、配点は、「個人口述コメンタリー」が15%、「個人口述プレゼンテーション」が15%です。

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

外部評価のためにSLとHLで提出される「記述課題」は生徒本人が取り組んだ学習成果物でなければなりません。しかし、学習成果物が「生徒本人が取り組んだものである」ことは、生徒自身がタイトルやトピックを決め、教師からの支援を一切受けずに、独自に内部評価課題に取り組まなければならないということではありません。以下の点について生徒にきちんと理解させるのは、教師の責任です。

- ・ 評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準（評価課題を通じて、生徒は与えられた評価規準に効果的に取り組むべきであること）

「個人口述コメンタリー」では、どの作品または抜粋が口述コメンタリー用に選ばれたのかについて、生徒は事前には知ることはできません。口述プレゼンテーションは、必ず生徒自身の成果物でなければならず、また、話す内容を全文書き出しておいて読むことは許可されていません。生徒本人が取り組んだものかどうかについては、作品の内容についての生

徒とのディスカッションと、生徒が使用したメモ（使用した場合のみ）を通じて、チェックすることが可能です。

教師と生徒が学習成果物について生徒本人が取り組んだものであると認証することは、評価の適正化を図るために試験官にサンプルとして提出する学習成果物だけに適用されるものではありません。すべての生徒の学習成果物に適用されます。生徒ないし教師が学習成果物について生徒本人が取り組んだものであることを認証できない場合、その学習成果物は採点対象外となります。その項目の評点は与えられず、成績評価も与えられません。詳細は、I B資料『学問的誠実性』と「*General regulations: Diploma Programme*」（総則:ディプロマプログラム）を参照してください。

時間配分

内部評価は「言語A：文学」におけるきわめて重要な要素です。SLとHLのいずれにおいても、最終評価の30%を占めます。この配点は、課題に取り組むのに必要な知識、スキルおよび理解を指導するための授業時間ならびに課題に取り組むために必要な合計時間を反映しています。

2年間のコースの間に、以下について考慮されなければなりません。

- ・ 教師が生徒に内部評価の要件を説明する時間
- ・ 授業内で生徒が内部評価課題に取り組む時間
- ・ 教師と各生徒が話し合う時間
- ・ 見直し、および進行状況を確認する時間

要件と推奨事項

「個人口述コメンタリー」と「個人口述プレゼンテーション」は、必ず「言語A」で学習した言語で行われなければなりません。

内部評価への評価規準の適用

内部評価には、多くの評価規準が設けられています。各評価規準には、特定の到達レベルを示す「レベルの説明」と、それに付随する評点が明示されています。「レベルの説明」では、主に達成できた成果に着目していますが、到達度の低いレベルでは、達成できなかった点を規準に含む場合もあります。

教師が標準レベル（SL）および上級レベル（HL）の内部評価課題を採点する際は、評価規準の項目に照らして判断しなければなりません。

- ・ SLおよびHLには異なる評価規準が設けられています。

- ・ ベストフィット（適合）モデルの考え方にに基づき、「レベルの説明」から、生徒の到達度を最も適切に示すレベルを見つけます。評価課題の到達レベルが規準に示されている要素によって異なる場合、補正するというのがベストフィット（適合）アプローチの考え方です。与えられる評点は、規準に照らした場合に、到達度のバランスを最も公正に反映するものでなければなりません。「レベルの説明」に挙げられている要素をすべて満たさなければ、その評点が得られないということではありません。
- ・ 生徒の成果物を評価する際、教師は、評価規準で評価課題のレベルを最も的確に示している説明に到達するまで、各レベルの説明を読まなければなりません。成果物が2つの説明のちょうど中間にあたると見られる場合、両方の説明を読み直し、生徒の成果物をより適切に示す方を選ばなければなりません。
- ・ 1つのレベルに複数の評点が割りあてられている場合、生徒の成果物について、説明内容を達成している度合いが大きければ（課題がその上のレベルに到達しそうな場合）、高い方の評点を与えます。説明内容を達成している度合いが小さければ（その下のレベルに近い場合）、低い方の評点を与えます。
- ・ 整数のみを用います。分数や小数などの部分点は認められません。
- ・ 教師は合格・不合格の線引きをするような考え方をせずに、各評価規準において、成果物を最も適切に表すレベルを判別することに専念しなければなりません。
- ・ 「レベルの説明」にある最高レベルは、欠点のない完璧なパフォーマンスを意味するものではありません。最高レベルとは、生徒が到達し得るものであるべきです。成果物が最高レベルの説明内容にあてはまるのであれば、教師は最高評点を与えることを躊躇してはなりません。
- ・ 1つの規準において到達度の高かった生徒が、他の規準においても到達度が高いとは限りません。同様に、1つの規準において到達度の低かった生徒が、他の規準においても到達度が低いとは限りません。教師は、生徒の全体的な評価がある特定の評点につながることを想定するべきではありません。
- ・ 生徒が評価規準に明示されるようにすることが推奨されています。

内部評価の詳細 ― 標準レベル（SL）

注：「個人口述コメントリー」では、内部評価の後、IBによる外部モデレーション（評価の適正化）が実施されます。「個人口述コメントリー」は、モデレーションの目的のために録音することが求められています。録音と録音済みテープの郵送の手順は毎年、『DP手順ハンドブック』に記載されます。

以下の表は、S Lの口述課題について内部評価の要件をまとめたものです。
各課題の最高得点は30点です。

| 個人口述コメンタリー (30点) | |
|---------------------|-------------------------------------|
| 抜粋 | 「パート2：精読学習」で学習した2つの文学作品のうちのいずれかより抜粋 |
| 準備時間 | 20分 |
| 合計実施時間 | 10分 |
| 実施時間の内訳 | 論評：8分 教師との質疑応答：2分 |
| 個人口述プレゼンテーション (30点) | |
| 作品 | 「パート4：自由選択」で学習した1つ以上の文学作品に基づく |
| 準備時間 | 生徒が自分の時間に準備を行う |
| 合計実施時間 | 10～15分 |

個人口述コメンタリー

配点：15%

所要時間：10分

- ・「個人口述コメンタリー」はシラバスの「パート2：精読学習」で学習した作品の抜粋に関する文学分析です。
- ・準備期間の前に生徒がパート2で学習した作品のうち、どれが抜粋の対象となるかを知ることは許可されていません。
- ・各抜粋は、教師が設定した2つの「ガイディング・クエスチョン 考察を促す問い」とともに提示されます。

焦点および構成

生徒は、抜粋の中の重要な点をすべて特定し、探究することを目指さなければなりません。具体的には、以下の点が含まれます。

- ・抜粋をそれが基づく作品の文脈（詩の場合はその本体）の中に可能な限り正確に位置づける。
- ・作者の技法テクニック〔スタイル（文体）の工夫や、それが読者に及ぼす影響など〕の効果について述べる。

口頭で論評コメンタリーをする際には、抜粋そのものに焦点を絞り、必要があれば作品全体に関連づけます（例えば、文脈を設定する）。抜粋部分を、生徒が当該の作品全体について知っている事項のすべてについて言及するためのきっかけとして用いてはなりません。

コメンタリー
論評は、一貫して整然と構成されたものである必要があります。相互に関連性のない事項の羅列、筋書きのナレーション、あるいは抜粋や詩を行ごとに言い換えたものであってはなりません。

生徒は、最長で8分間にわたって話し、その後の2分間を質疑応答にあてます。生徒の話が8分間に満たなかった場合、残り時間のすべてを質疑応答にあてて10分間としなければなりません。

抜粋箇所の選択

抜粋の長さは、内容の複雑さによりますが、20～30行とします。詩の場合は、教師は1つの完結した詩を使用することも、長編の詩から重大な部分を抜粋して用いることもできます。比較的短い詩は、コメンタリー論評を行うのに十分な材料がある場合にのみ適しているといえます。

生徒には、ページ数、見出し、注釈や書き込みなどのない抜粋のコピーを渡されなければなりません。

抜粋の数

履修している生徒数に応じて、異なる抜粋を用意します。最小限必要な生徒数別の抜粋の数は、以下の通りです。

| 生徒数 | 必要とされる抜粋の数 |
|-------|------------|
| 1～5 | 生徒1人につき1 |
| 6～10 | 6 |
| 11～15 | 7 |
| 16～20 | 8 |
| 21～25 | 9 |
| 26～30 | 10 |

「考察を促す問い」

教師は、個々の抜粋について、1つまたは2つの設問を設定します。

ガイディングクエスチョン
「考察を促す問い」は、抜粋の最も重大な要素に関連するもので、生徒が分析する際に役立つものでなければなりません。ディスカッションのポイントを示唆するものでなければなりません。生徒が「考察を促す問い」を分析に使用するかどうかは任意です。生徒のコメンタリー論評が直接、ガイディングクエスチョン「考察を促す問い」を取り上げなくても、減点されることはありません。

ガイディングクエスチョン
以下の「考察を促す問い」のリストは、教師が独自の設問を作成する際に役立つことを意図しています。教師自身が選択した抜粋に適している場合、サンプルの設問を直接使用することもできます。教師用参考資料には、より多くの設問のサンプルが含まれています。

設問は、大まかな文学のジャンル別にまとめられています。しかしながら、各言語の「指定作家リスト」(PLA)には独自のジャンル区分があり、それらは以下の区分と多少異なる場合があります。

戯曲

- ・ 使用された言葉遣いにより、登場人物について何がわかるか。
- ・ 音楽／音響／照明は、この抜粋において、どのような役割を担っているか。
- ・ この抜粋は、観客にどのような影響をもたらすと考えられるか。
- ・ どのような理由で、この抜粋は、この演劇の極めて重要な瞬間であると考えられるか。

散文：小説および短編小説

- ・ トピックを伝えるために、この抜粋の中で構成はどのように機能しているか。
- ・ 物語と会話のバランスは、この抜粋を理解する上でどのような影響を及ぼしているか。
- ・ 作品の重要なテーマは、この抜粋の中でどのように展開されているか。
- ・ この抜粋は、登場人物に対する理解をどのように変えるか。

フィクション以外の散文

- ・ この抜粋の中で、文章の構成はどのような効果をもたらすために使用されているか。
- ・ この抜粋の中に使用されたスタイル（文体）は、どのような点で作品全体の典型であるといえるか。
- ・ この抜粋は、読者にどのような影響を与えると考えられるか。
- ・ この抜粋の中で、考えの論理的な順序はどの程度重要か。

詩

- ・ タイトルと詩そのものは、どのような関係にあるか。
- ・ 考えの深化は、テーマの発展にどのように寄与しているか。
- ・ 連の構成は、詩のトピックの展開をどのように反映しているか。
- ・ どのような点で、最終行／連は詩全体への理解を変えるか。

個人口述コメントリーの実施

教師は、IBの規則と提出期限に沿って、「個人口述コメントリー」を実施する場所と時間を選択します。「個人口述コメントリー」は、教師の判断に基づき、1日で実施しても、数日間にわたって実施しても構いません。口述試験の実施日について、生徒に必ず十分な通知をしてください。

準備時間（20分）

準備時間には、生徒は監督下で、以下を行います。

- ・ 抜粋および添付された「ガイディングクエスチョン考察を促す問い」を注意深く読み込む。
- ・ 抜粋の重要な点すべてを特定し、注意深く分析する。
- ・ コメントリー論評のために考えを書き留める。
- ・ コメントリー論評の構成をまとめる。

実施時間（8分）

生徒は、必ず中断されることなく、^{コメンタリー}論評を述べる必要が認められます。教師は、決して生徒の気を散らしたり、^{コメンタリー}論評を再構成しようと試みたりしてはいけません。生徒がパニックに陥ったために前向きな励ましが必要な場合、または生徒がまったく的外れだったり、継続するのが困難である場合にのみ介入することができます。

質疑（2分）

教師は、抜粋または詩に対する生徒の知識と理解について、さらに試すため、必ず生徒とディスカッションを行います。比較的自信に乏しい生徒の場合は、教師が^{ガイディングクエスション}「考察を促す問い」に基づいて生徒の考えを引き出し、^{コメンタリー}疑わしい主張や不適当な主張を改善したり、^{コメンタリー}論評を拡大したりする機会を与えなければなりません。

教師は、生徒が特定の言葉、言い回しや含意を理解し、また抜粋ないし詩において、それらが大事であることを認識させなければなりません。さらに、生徒に作品全体における抜粋の重要性を、また完結した詩の場合は学習した同じ作者の他の詩との関係を理解させなければなりません。

教師は、生徒が作者の技法を理解し、それについて語るができるようにするべきです。

個人口述プレゼンテーション

注：「個人口述プレゼンテーション」は内部評価され、IBによるモデレーション（評価の適正化）は、「個人口述コメンタリー」を通じて実施されます。「個人口述プレゼンテーション」の録音はIBへは送られません。詳細は毎年『DP手順ハンドブック』に記載されます。

配点：15%

所要時間：10～15分

「個人口述プレゼンテーション」はシラバスの「パート4：自由選択」で学習した1つ（または複数の）作品に基づいて実施します。各生徒は教師と相談の上、プレゼンテーションのトピックを選択します。

トピックの選択

生徒は個人的な興味を反映するトピックを選びます。学習した作品のあらゆる側面に基づいてトピックを決定することができます。例えば、以下のようなトピックが考えられます。

- ・ 作品の文化的背景とそれに関連する諸問題
- ・ テーマの焦点
- ・ 人物描写
- ・ 技法とスタイル（文体）

- ・ 作品の特定の要素（例えば登場人物、話題など）に関する作者の態度
- ・ 特定の要素に関する別の観点からの解釈

個人口述プレゼンテーションの焦点

個々の口述プレゼンテーションの焦点は、選択したトピックの範囲や性質によって決定されます。トピックとプレゼンテーションの種類にかかわらず、生徒は以下を示すことが期待されています。

- ・ 作品に対する知識と理解
- ・ 議論された見方についての徹底した認識
- ・ 聴衆の関心を引くストラテジーの巧みな使い方
- ・ タスクに適切な方法を用いたプレゼンテーションの実施

個人口述プレゼンテーションの構成

各々の口述プレゼンテーションの構成は、トピックのために選択された活動に大きく左右されます。

トピックの目的を最も効果的に伝えるプレゼンテーションの種類を選択するのは生徒の責任です。どのような活動を選択した場合も、プレゼンテーションはすべて一貫性のある構成をとらなければなりません。

個人口述プレゼンテーションの準備

生徒は、授業時間外にプレゼンテーションの準備を行うことが期待されています。生徒がプレゼンテーションのトピックを選択した後、以下は生徒の責任となります。

- ・ プレゼンテーションに適切な資料を選択すること
- ・ 一貫性のある構成にするために資料を整理すること
- ・ 活動とトピックに適したプレゼンテーションの手段および方法を選択すること

推奨される活動

以下のリストは、「パート4：自由選択」で学習されたすべての選択肢に適用され、「個人口述プレゼンテーション」で許容される幅広い活動の例を含んでいます。このリストは、完全なものでも規範的なものでもありません。ここに挙げた例は提案に過ぎず、教師または生徒が教師の許可を得てさらに提案を追加することが可能です。生徒は選択したトピックに最適の活動を選ぶ必要があります。

「個人口述プレゼンテーション」は、2人組でも、複数の生徒から成る小グループの一部としても行うことが可能です。その場合は、各生徒は10～15分の長さの個人プレゼンテーションを行い、教師はそれらを個別に評価しなければなりません。

- ・ 学習したジャンルの1つのスタイル（文体）を踏襲して作成された生徒独自の記述物の批評
- ・ 1人の作家の作品の特定の側面に関する説明

- ・ ある作品の特定の解釈についての検証
- ・ 特定の作家の作品の設定と、別の社会的背景の詳細や政治的見解などとの対比
- ・ ある作家の作品または1つのテキストにおける特定のイメージ、考えまたはシンボルの使用についての解説
- ・ 学習した詩のパフォーマンスまたは模倣作（パスティーシュ）。この活動は、その後、生徒が試みたことについて説明と議論をすることが必要とされる。
- ・ 2つの章、2つの登場人物、または2つの作品の比較
- ・ 授業中に学習した作品の章に関する解説（自宅で準備）
- ・ ある作品に関する生徒の発展的な取り組みについての説明
- ・ ある作品について2つの相反する解釈の提示
- ・ 作品の重要な局面における、ある登場人物の独白または会話
- ・ 登場人物のその後の人生のある時点における回想
- ・ 作品に対するある特定の文脈での解釈についての作家の対応（例えば、反政府活動や不道德行為を非難されて、検閲会で自分の作品を決定的に擁護するなど）

創造的なプレゼンテーションを行う選択をした生徒は、プレゼンテーションに対する論理的根拠を述べなければなりません。

プレゼンテーションの実施とその後の議論

教師は、生徒がプレゼンテーションを行っている間、決して介入したり、手助けしたりしてはいけません。

プレゼンテーションの終了後、教師は、課題作品またはトピックについて生徒の知識と理解をさらに探るため、生徒と議論することが許可されています。教師は、生徒が以下の選択について正当化することができれば、納得するものとします。

- ・ プレゼンテーションに使用した資料
- ・ トピックを伝えるために選択した活動
- ・ プレゼンテーションのスタイルの適格性

その後の議論には、クラス全員が参加することが可能です。しかしながら、生徒はプレゼンテーション（必要な場合は論理的根拠も含む）についてしか評価されません。

内部評価規準 —— 標準レベル（SL）

概要

個人口述コメントリー

SLには、4つの評価規準があります。

| | | |
|-----|-------------------|-----|
| 規準A | 課題文（抜粋）についての知識と理解 | 10点 |
| 規準B | 作者の選択についての認識 | 10点 |

| | | |
|-----|--------------|------------|
| 規準C | 構成とプレゼンテーション | 5点 |
| 規準D | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 30点 |

個人口述プレゼンテーション

SLには、以下の3つの評価規準があります。

| | | |
|-----|----------------|------------|
| 規準A | 課題作品についての知識と理解 | 10点 |
| 規準B | プレゼンテーション | 10点 |
| 規準C | 言語 | 10点 |
| | 合計 | 30点 |

教師と生徒の参考のために、試験官が使用している評価規準の具体的な「レベルの説明」を以下に記します。

個人口述コメンタリー（SL）

規準A：課題文（抜粋）についての知識と理解

- ・ 抜粋に関する生徒の知識と理解が、独自の解釈によりどの程度うまく実証されたか。

注：「個人口述コメンタリー」用の抜粋は、必ず「指定作家リスト」（PLA）から選ばれた文学作品のものでなければなりません。この条件を満たしていない場合には、この規準の評点は6が最高点となります。

| 評点 | レベルの説明 |
|------|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 知識が事実上まったくないことが、抜粋への無関係または重要でない（あるいはその両方）参照により示されている。 |
| 3～4 | 知識が多少あることが、抜粋への一部関連のある参照と非常に限られた解釈により示されている。 |
| 5～6 | 十分な知識と理解があることが、概ね適切な参照に裏づけられた解釈により示されている。 |
| 7～8 | 優れた知識と理解があることが、抜粋への関連性のある適切な参照に裏づけられた解釈により示されている。 |
| 9～10 | 非常に優れた知識と理解があることが、適切に選ばれた抜粋への参照に裏づけられた注意深い解釈により示されている。 |

規準B：作者の選択についての認識

- ・ 生徒は作者の言語、構成、技法^{テクニック}およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについてどの程度認識しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|------|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が抜粋の中で意味するものについて事実上、言及されていない。 |
| 3～4 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が抜粋の中で意味を形成している方法について一部言及されている。 |
| 5～6 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が抜粋の中で意味を形成している方法について適切に言及され、一部認識されている。 |
| 7～8 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が抜粋の中で意味を形成している方法について、常に適切に認識されている。 |
| 9～10 | 言語、構成、技法およびスタイル（文体）が抜粋の中で意味を形成している方法について、非常に優れた認識を示している。 |

規準C：構成とプレゼンテーション

- ・ 生徒はどの程度構成の整った、的を絞った^{コメントリー}論評を行っているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--------------------------------------|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 論評には、事実上、まったく構成または焦点（あるいはその両方）がない。 |
| 2 | 論評は構成を試みた証拠が限定的であり、ときどきしか焦点が絞られていない。 |
| 3 | 論評は構成を試みた証拠が一部あり、全般に焦点が絞られている。 |
| 4 | 論評は明確に計画された構成があり、焦点が絞られている。 |
| 5 | 論評は非常に明確な構成があり、焦点が一貫している。 |

規準D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では生徒による課題に適切な語彙、語調、文の構成、専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文章の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは、ときどき明確で適切に選択されている。文法、語彙、文章の構成は一応正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。 |
| 3 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文の章構成もいくつかのささいな誤りはあるが、ある程度適切である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成は適度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は一貫して適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、すべて適切に選ばれている。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、適切である。 |

個人口述プレゼンテーション（SL）

規準A：課題作品についての知識と理解

- ・プレゼンテーションで使用した作品について生徒がどの程度の知識と理解を示しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|------|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 発表した作品についての知識は非常に限られており、その内容を事実上まったく理解していない。 |
| 3～4 | 発表した作品について多少の知識と表面的な内容理解がある。 |
| 5～6 | 発表した作品の内容とその意味するところについて適切な知識と理解がある。 |
| 7～8 | 発表した作品の内容とその意味するところの多くについて優れた知識と理解がある。 |
| 9～10 | 発表した作品の内容とその意味するところの大半について非常に優れた知識と理解がある。 |

規準 B：プレゼンテーション

- ・ プレゼンテーションの効果的かつ適切な方法についてどの程度の配慮がなされているか。
- ・ 聴衆の関心を引くためにどの程度のストラテジー（例えば、可聴性、アイコンタクト、ジェスチャー、資料の効果的な使い方など）が用いられているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|------|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | プレゼンテーションの方法が不適切で、聴衆の関心を引く試みが事実上まったくなされていない。 |
| 3～4 | プレゼンテーションの方法がときどき適切であり、聴衆の関心を引く試みが若干なされている。 |
| 5～6 | プレゼンテーションの方法は概して適切であり、聴衆の関心を引こうとする意欲が示されている。 |
| 7～8 | プレゼンテーションの方法は一貫して適切であり、聴衆の関心を引くために適切なストラテジーが用いられている。 |
| 9～10 | プレゼンテーションの方法は効果的であり、聴衆の関心を引くために非常に優れたストラテジーが用いられている。 |

規準 C：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では生徒による課題に適切な語彙、語調、文の構成、専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|-----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 言葉遣いは不適切で、選択したプレゼンテーションに適合した レジスターやスタイル（文体）を選択する試みが事実上一切なされていない。 |
| 3～4 | 言葉遣いは一部適切だが、レジスターやスタイル（文体）を選択したプレゼンテーションに適合化させる意識が少ししか見られない。 |
| 5～6 | 言葉遣いの大半は適切であり、選択したプレゼンテーションに適合した レジスターやスタイル（文体）への配慮が一部なされている。 |

| 評点 | レベルの説明 |
|------|--|
| 7～8 | 言葉遣いは明確かつ適切であり、レジスターとスタイル（文体）は巧みで選択したプレゼンテーションに適合している。 |
| 9～10 | 言葉遣いは非常に明確かつ完全に適切であり、レジスターとスタイル（文体）は選択したプレゼンテーションに一貫して効果的かつ適合している。 |

内部評価の詳細——上級レベル（HL）

注：「個人口述コメントリー」では、内部評価の後、IBによる外部モデレーション（評価の適正化）が実施されます。「個人口述コメントリー」は、モデレーションの目的のために録音することが求められています。録音と録音済みテープの郵送の手順は毎年、『DP手順ハンドブック』に記載されます。

以下の表は、上級レベルの正規の口述課題の要件をまとめたものです。それぞれの課題の最高得点は30点です。

| 個人口述コメントリーおよびディスカッション（30点） | |
|----------------------------|--------------------------------|
| 抜粋 | 「パート2：精読学習」で学習した詩 |
| 準備時間 | 20分（論評の準備、ディスカッションの準備時間はなし） |
| 所要時間合計 | 20分（口頭での論評10分の後、ディスカッション10分） |
| 所要時間内訳 | 口頭での論評：論評8分の後、教師との質疑応答2分の計10分 |
| 個人口述プレゼンテーション（30点） | |
| 課題作品 | パート4で学習した作品1つかそれ以上 |
| 準備時間 | 生徒が授業外の自分の時間を使ってプレゼンテーションを準備する |
| 所要時間合計 | 10～15分 |

個人口述コメントリーとディスカッション

配点：15%

所要時間：20分

個人口述コメントリー：10分

- ・「個人口述コメントリー」は詩、または詩の抜粋の文学分析です。対象作品はコースのシラバスの「パート2：精読学習」で学習した詩の中から教師が選択します。

- ・ 生徒は準備期間が始まるまで、対象の詩、または詩の抜粋がどの作品であるかを知ることができません。
- ・ 詩には、教師による1つまたは2つの「^{ガイディングクエスチョン}考察を促す問い」が添えられなければなりません。

ディスカッション：10分

- ・ ディスカッションは、個人の口頭での^{コメンタリー}論評の終了直後に、教師が録音を止めずに実施します。
- ・ ディスカッションでの問いかけの対象となる作品は、「パート2：精読学習」で学習し、口頭での^{コメンタリー}論評では使用されなかった2つの作品のうちの1つでなければなりません。
- ・ 生徒が事前にディスカッションの対象となる作品を知ることが許可されていません（明らかにされるのは、口頭での^{コメンタリー}論評の後です）。

焦点と構成

生徒は、抜粋の中の重要な点をすべて特定し、探究することを目指さなければなりません。具体的には、以下の点が含まれます。

- ・ 抜粋を、その元となった詩（または完全な詩の場合はその作品の本体）の文脈に可能な限り正確に位置づける。
- ・ 文体的技巧とそれが読者に与える効果など、作者の技法の有効性について解説する。

^{コメンタリー}口頭で論評を行う際には、詩の全体（詩全体が使われた場合は、その他の一連の作品）に関連させながらも、抜粋に焦点を絞らなければなりません。^{コメンタリー}論評は、その作品について生徒が知り得るすべてを議論するためのきっかけとして使われるべきではありません。

^{コメンタリー}論評は、一貫性をもって理路整然としていなければなりません。まとまりのないポイントの羅列、ナレーション形式、詩または章を1行ずつ言い換える形であってはなりません。

生徒は、最長8分話し（超過すべきではない）、その後2分間を質疑にあてます。生徒の話が8分間に達しなかった場合、残りを質疑にあて、全体を10分間にしなければなりません。

抜粋の選択

抜粋の長さは内容の複雑さによりますが、20～30行とすべきです。教師は1つの完結した詩、または長編の詩の重要な部分の抜粋を用いることもできます。比較的短い詩は、コメントするのに十分な材料がある場合のみ適しているといえます。

生徒には、ページ数、見出し、注釈や書き込みなどのない抜粋のコピーを渡されなければなりません。

抜粋の数

履修している生徒数に応じて、異なる抜粋を用意します。最小限必要な生徒数別の抜粋の数は、以下の通りです。

| 生徒数 | 必要とされる抜粋の数 |
|-------|------------|
| 1～5 | 生徒1人につき1 |
| 6～10 | 6 |
| 11～15 | 7 |
| 16～20 | 8 |
| 21～25 | 9 |
| 26～30 | 10 |

「考察を促す問い」

教師は、個々の抜粋について、1つまたは2つの設問を設定します。

「ガイディングクエスチョン考察を促す問い」は、抜粋の最も重大な要素に関連するもので、生徒が分析する際に役立つものなければなりません。ディスカッションのポイントを示唆するものでなければなりません。生徒が「ガイディングクエスチョン考察を促す問い」を分析に使用するかどうかは任意です。生徒のコメント論評が直接、「ガイディングクエスチョン考察を促す問い」を取り上げなくても、減点されることはありません。

以下の「ガイディングクエスチョン考察を促す問い」のリストは、教師が独自の設問を作成する際に役立つことを意図しています。教師自身が選択した抜粋に適している場合、サンプルの設問を直接使用することもできます。教師用参考資料には、より多くの設問のサンプルが含まれています。

- ・ 詩のタイトルと詩自体の関係はどのようなものか。
- ・ この詩にはどのような音感に訴える効果が使用されているか。
- ・ 考えの進展は1つ（ないし複数）のテーマの発達にどのように寄与しているか。
- ・ 話し手の性格は、使用された言葉遣いによりどのように明らかにされているか。
- ・ この詩は、読者の中にどのような感情的反応を作り出そうと試みているか。
- ・ 連の構成は詩のトピックをどのように反映しているか。
- ・ 最終行／連は、どのような方法で詩全体についての理解を変えるか。
- ・ 詩に使用された比喩的な言葉は、読者の想像力をどのように刺激することを目指しているか。
- ・ 使用された句読点は、詩の読み方／聴こえ方にどのような影響を及ぼしているか。
- ・ この詩に使用されたリズムは、どのような効果を生んでいるか。
- ・ 詩を通じて、語調は、どのように変化しているか。
- ・ この詩において、何が曖昧であると考えられるか。
- ・ 抜粋は、登場人物の思考や感情をどのように明らかにしているか。
- ・ 使用されている比喩的な言葉遣いは、内容をどのように伝えているか。

個人口述コメントの実施

教師は、IBの規則と提出期限に沿って、「個人口述コメント」を実施する場所と時間を選択します。「個人口述コメント」は、教師の判断に基づき、1日で実施しても、

数日間にわたって実施しても構いません。口述試験の実施日について、生徒に必ず十分な通知をしてください。

準備時間（20分）

準備時間には、生徒は監督下で、以下を行います。

- ・ 抜粋および添付された「ガイディングクエスチョン 考察を促す問い」を注意深く読み込む。
- ・ 抜粋の重要な点すべてを特定し、注意深く分析する。
- ・ コメンタリー 論評のために考えを書き留める。
- ・ コメンタリー 論評の構成をまとめる。

実施（8分）

生徒は、必ず中断されることなく、コメンタリー 論評を述べる必要が認められます。教師は、決して生徒の気を散らしたり、コメンタリー 論評を再構成しようと試みたりしてはいけません。生徒がパニックに陥ったために前向きな励ましが必要な場合、または生徒がまったく的外れだったり、継続するのが困難である場合にのみ介入することができます。

質疑（2分）

教師は、抜粋または詩に対する生徒の知識と理解について、さらに試すため、必ず生徒とディスカッションを行います。比較的自信に乏しい生徒の場合は、教師が「ガイディングクエスチョン 問い」に基づいて生徒の考えを引き出し、疑わしい主張や不適当な主張を改善したり、コメンタリー 論評を拡大したりする機会を与えなければなりません。

教師は、生徒が特定の言葉、言い回しや含意を理解し、また抜粋ないし詩において、それらが大事であることを認識させなければなりません。さらに、生徒に作品全体における抜粋の重要性を、また完結した詩の場合は学習した同じ作者の他の詩との関係を理解させなければなりません。

教師は、生徒が作者の技法を理解し、それについて語るができるようにするべきです。

ディスカッションの実施

論評からの移行

10分間に及ぶコメンタリー 論評と質疑の後、教師は、生徒にディスカッションを開始することを知らせます。（注：録音は継続されます）。

ディスカッションの目的は、生徒が作品に関する文学的議論をすることです。準備された設問は、ディスカッションの出発点になりますが、ディスカッションの内容をそれらの設問に限定する必要はありません。生徒にディスカッションの対象となっている作品に関する独自の理解を示す機会を与えるべきです。

以下の設問は、手引きとなることを意図したものです。当該作品に適切であれば使用することができますが、教師は独自の設問を任意で作成できます。

ディスカッションでの問いかけの例

散文：小説または短編小説

- ・ どの架空の人物が最も興味深かったか。作者がその人物を組み立てる上で行ったいくつかの選択に基づく影響を説明できるか。

- ・ 小説中である意味注意をそらせるような仕掛け（例えば偶然のできごと、または未解決の質問、疑わしい解決、偶然の出会いなど）に気づいたか。
- ・ 設定は、どの程度強力に小説中のできごとや行動に影響を及ぼしている（または及ぼしていない）と考えるか。
- ・ 小説または短編小説の結論は、どの程度感情的または知的に満足 of いくものであると感じているか。
- ・ 当該小説または短編小説を読み進めるのに、どのくらい夢中になったか。

演劇

- ・ 劇作家が観客を引き込み興味を持続させるために異なる種類のテンションを使用していると考えたか。
- ・ あなた自身にとって劇の中で最も魅力的、または満足 of いく瞬間はどこだったか。劇作家がその効果をどのように達成したかを説明できるか。
- ・ 何が主人公の長所と短所で、それらが劇の信憑性にどのような影響を及ぼしていると考えるか。
- ・ 劇中で最も気に入った、または気に入らない脇役は何だったか。劇作家はどのようにしてそのような反応を引き出したかわかるか。
- ・ この劇の中で深遠な人類の真実が検討されていると考えるか。または、この劇の主な目的は人類の行動に対する観客の興味を保たせることであると考えるか。

フィクション以外の散文

- ・ 文脈の中でどのような文化的側面が作家の物語に最大の影響を及ぼしていると考えるか。
- ・ 作品の中で作家以外に強い印象を残した人物はいるか。
- ・ 作家の経験談に大幅に欠如していると考えられる人生の側面はあったか。
- ・ 作品のどのような点（例えば歴史または地理、人との出会いまたは作家に対する個人的な反応など）に、最も魅力を感じたか。
- ・ 作品の中の逸話の役割は何か。作家はそれをどの程度うまく活用していると考えるか。
- ・ 場所／人々／考えなどについて作家の反応または態度について懐疑的に思うことはあるか。
- ・ 当該作品のテーマは人間のどのような問題か。その中で特にうまく対応されたものはあるか。
- ・ エッセイストは、作品を特に満足 of 行く結論に導くスキルに長けていると考えたか。

口述活動についての詳細な手順は I B 資料『DP 手順ハンドブック』に記載されています。教師用参考資料には、より多くのディスカッションでの問いかけのサンプルが収録されています。

個人口述プレゼンテーション

注:「個人口述プレゼンテーション」は内部評価され、IBによるモデレーション（評価の適正化）は、「個人口述コメンタリー」を通じて実施されます。「個人口述プレゼンテーション」の録音はIBへは送られません。詳細は毎年『DP手順ハンドブック』に記載されます。

評価の詳細は、SLと同様です。

内部評価規準——上級レベル（HL）

概要

個人口述コメンタリーおよびディスカッション

HLでは、以下の6つの評価規準があります。

| | | |
|-----|----------------------------|------------|
| 規準A | 詩の知識と理解 | 5点 |
| 規準B | 作者の選択についての認識 | 5点 |
| 規準C | 論評の構成とプレゼンテーション | 5点 |
| 規準D | ディスカッションに使用された作品についての知識と理解 | 5点 |
| 規準E | ディスカッションでの問いかけに対する答え | 5点 |
| 規準F | 言語 | 5点 |
| | 合計 | 30点 |

個人口述プレゼンテーション

HLでは、以下の3つの評価規準があります。

| | | |
|-----|----------------|------------|
| 規準A | 課題作品についての知識と理解 | 10点 |
| 規準B | プレゼンテーション | 10点 |
| 規準C | 言語 | 10点 |
| | 合計 | 30点 |

教師と生徒の参考用に、試験官が使用している評価規準の具体的な「レベルの説明」を以下に記します。

個人口述コメンタリーとディスカッション（HL）

規準A：詩の知識と理解

- ・ 課題の詩に対する生徒の知識と理解は、彼らの解釈によりどの程度うまく表明されているか。

注：「個人口述コメンタリー」用の抜粋は必ず「指定作家リスト」（PLA）から選ばれた詩のものでなければなりません。この条件を満たしていない場合には、この規準の評点は3が最高点となります。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 詩に対する知識が限定的で、ほとんど、またはまったく理解しておらず、解釈が貧弱で、事実上詩への関連のある参照はほとんどない。 |
| 2 | 表面的な知識と若干の理解があり、解釈は限定的でときどき詩への参照に裏づけられている。 |
| 3 | 適切な知識と理解があることが、詩への適切な参照に裏づけられている解釈から見て取れる。 |
| 4 | 非常に優れた知識と理解があることが、厳選された詩への参照で裏づけられた注意深い解釈から見て取れる。 |
| 5 | 素晴らしい知識と理解があることが、厳選された的確な詩への参照で効果的に裏づけられた独自の解釈から見て取れる。 |

規準B：作者の選択についての認識

- ・ 生徒は作者の言語、構成、技法^{テクニック}およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについてどの程度認識しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 詩における言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法についての言及がほとんどなく、まったく認識されていない。 |
| 2 | 詩における言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について若干の言及はあるものの、ほとんど認識されていない。 |
| 3 | 詩における言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法について適切に認識されている。 |

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 4 | 詩における言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法についての優れた認識がなされている。 |
| 5 | 詩における言語、構成、技法およびスタイル（文体）が意味を形成している方法についての認識が非常に優れている。 |

規準 C：論評の構成とプレゼンテーション

- ・ 生徒は、どの程度、構成を考慮し、焦点を絞った論評^{コメントリー}を行っているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 論評には計画性の証拠がほとんど見られず、構成または焦点（あるいはその両方）が非常に限定的である。 |
| 2 | 論評には、若干の構成と焦点が見られる。 |
| 3 | 論評には、計画された構成が見られ、全般的に焦点が見られる。 |
| 4 | 論評には、明確な構成があり、持続的な焦点がある。 |
| 5 | 論評は、効果的に構成され、焦点が明確、意図的かつ持続的である。 |

規準 D：ディスカッションに使用された作品についての知識と理解

- ・ ディスカッションに使用した作品についてどの程度の知識と理解を示しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | ディスカッションに使用した作品の内容についてほとんど知識がなく、理解もしていない。 |
| 2 | ディスカッションに使用した作品の内容について若干の知識があり、表面的に理解している。 |
| 3 | ディスカッションに使用した作品の内容と関連事項の一部について適切な知識と理解がある。 |
| 4 | ディスカッションに使用した作品の内容と関連事項のほとんどについて非常に優れた知識と理解がある。 |
| 5 | ディスカッションに使用した作品の内容と関連事項についての知識と理解が非常に優れている。 |

規準E：ディスカッションでの問いかけに対する答え

- ・ 生徒がディスカッションでの問いかけに対しどの程度効果的に答えているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | ディスカッションでの問いかけに対し、有意義に答える能力が限定的である。 |
| 2 | ディスカッションでの問いかけに対する一部の答えが無関係である。 |
| 3 | ディスカッションでの問いかけに対する答えは関連性があり、自分自身で考えた証拠がいくつか見られる。 |
| 4 | ディスカッションでの問いかけに対する答えは知識豊富で、自分自身でよく考えたことを示している。 |
| 5 | ディスカッションでの問いかけに対し、説得力があり自分自身の考えを示している。 |

規準F：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では生徒による課題に適切な語彙、語調、文の構成、専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|----|---|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1 | 言葉遣いが明確かつ適切である場合はほとんどない。文法、語彙、文の構成の誤りが随所に見られ、レジスターやスタイル（文体）についての認識がほとんどない。 |
| 2 | 言葉遣いは、ときどき明確で適切に選択されている。文法、文の構成は全体的に正確であるが、誤りや矛盾が目立つ。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を一部使用している。 |
| 3 | 言葉遣いは、ほとんど明確で適切に選択されており、文法、文の構成もある程度適切である。課題に適切なレジスターとスタイル（文体）を大部分で使用している。 |
| 4 | 言葉遣いは、明確で適切に選択されており、文法、語彙、文章の構成は適度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は一貫して適切である。 |
| 5 | 言葉遣いは、非常に明確であり、すべて適切に選ばれている。文法、語彙、文章の構成は高度に正確である。レジスターとスタイル（文体）は効果的で、適切である。 |

個人口述プレゼンテーション (HL)

規準A：課題作品についての知識と理解

- ・ プレゼンテーションに使用した作品について生徒はどの程度理解を示しているか。

| 評点 | レベルの説明 |
|------|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 発表した作品の内容に関する知識と理解がほとんど認められない。 |
| 3～4 | 発表した作品の内容に関する知識は若干あり、表面的に理解している。 |
| 5～6 | 発表した作品の内容、および関連事項の一部に対する適切な知識と理解が認められる。 |
| 7～8 | 発表した作品の内容、および関連事項の大半について非常に優れた知識と理解が認められる。 |
| 9～10 | 発表した作品の内容と関連事項についての知識と理解が非常に優れている。 |

規準B：プレゼンテーション

- ・ 効果的かつ適切なプレゼンテーションを行う上で、どの程度の配慮がなされているか。
- ・ 聴衆の関心を引きつける上で、どの程度ストラテジーが用いられているか（例えば、可聴性、アイコンタクト、ジェスチャー、補助教材の効果的な使用など）。

| 評点 | レベルの説明 |
|------|---|
| 0 | プレゼンテーションは、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | プレゼンテーションの話し方がほとんど適切ではなく、聴衆の関心を引く試みはほとんどなされていない。 |
| 3～4 | プレゼンテーションの話し方は一部適切であり、聴衆の関心を引く試みが若干なされている。 |
| 5～6 | プレゼンテーションの話し方は適切で、聴衆の関心を引きつける明らかな意図が見られる。 |
| 7～8 | プレゼンテーションの話し方は効果的で、聴衆の関心を引くために適切なストラテジーが用いられている。 |
| 9～10 | プレゼンテーションの話し方は非常に効果的で、聴衆の関心を引くため意図的なストラテジーが用いられている。 |

規準C：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・ 言語使用域（レジスター）、スタイル、専門用語の選択はどの程度適切か（この文脈では生徒による課題に適切な語彙、語調、文の構成、専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ）。

| 評点 | レベルの説明 |
|------|--|
| 0 | 成果物は、以下に記す基準に達していない。 |
| 1～2 | 言葉遣いが適切であることはほとんどなく、レジスターやスタイル（文体）を選択したプレゼンテーションに適合化させる試みが非常に限定的である。 |
| 3～4 | 言葉遣いは一部適切であり、レジスターやスタイル（文体）を選択したプレゼンテーションに適合化させる試みが一部なされている。 |
| 5～6 | 言葉遣いの大半は明確かつ適切であり、選択したプレゼンテーションに適合したレジスターやスタイル（文体）への配慮が一部なされている。 |
| 7～8 | 言葉遣いは明確かつ適切であり、レジスターとスタイル（文体）は一貫して選択したプレゼンテーションに適合している。 |
| 9～10 | 言葉遣いは非常に明確かつ完全に適切であり、レジスターとスタイル（文体）は選択したプレゼンテーションに一貫して効果的かつ適合している。 |

指示用語の解説

「言語A：文学」のための指示用語と定義

生徒は、試験問題で使用される次の重要な指示用語および表現に慣れておく必要があります。指示用語は、以下の定義に基づいて理解されなければなりません。これらの用語は試験問題に頻出しますが、それ以外の用語を用いて、生徒に特定の方法で議論を展開するよう指示する場合があります。

| | |
|-------------------------------------|--|
| 分析しなさい Analyse | 本質的な要素または構造を明らかにするために分解しなさい。 |
| コメントしなさい Comment | 与えられた記述または計算結果に基づき、見解を述べなさい。 |
| 比較しなさい Compare | 2つ（またはそれ以上）の事物または状況の類似点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。 |
| 比較して、対比しなさい Compare and contrast | 2つ（またはそれ以上）の事物または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。 |
| 対比しなさい Contrast | 2つ（またはそれ以上）の事物または状況の相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。 |
| 詳述しなさい Describe | 詳しく述べなさい。 |
| 論じなさい Discuss | いくつかの議論、要素、または仮説を取り上げ、それらについて熟考し、バランスよく批評しなさい。意見または結論は、適切な証拠 ^{エビデンス} を挙げて、はっきりと述べなさい。 |
| 評価しなさい Evaluate | 長所および短所を比較し、価値を定めなさい。 |
| 考察しなさい Examine | 論点の前提および相互関係が明らかになるように、主張または概念について熟考しなさい。 |
| 説明しなさい Explain | 理由や要因を含む、詳しい事情を述べなさい。 |

| | |
|-------------------------------|--|
| 探究しなさい Explore | 何かを発見するための系統立ったプロセスに取り組みなさい。 |
| 解釈しなさい Interpret | 与えられた情報から傾向をつかんで結論を引き出すため、知識および理解を用いなさい。 |
| 正当化しなさい Justify | 解答または結論を裏づける、有効な理由または証拠 ^{エビデンス} を述べなさい。 |
| どの程度 To what extent | 議論または概念の利点 ^{エビデンス} を熟考しなさい。意見および結論ははっきりと提示し、適切な証拠および論理的に正しい論拠をもたせなさい。 |